

9. 昆虫類（甲虫類ほか）

昆虫は種類が極めて多く、世界の既知種は約百万種であるが、熱帯雨林の調査が進展するにつれて実際には三千万種かそれ以上、または研究者によっては五百万から一千万種が現存すると推定している。日本産の昆虫は、1988年現在28937種記録されているが、その後毎年300種程度増えているので、既知種は33000種に達していると思われる。しかし、実際に日本に生息する昆虫は10万種か15万種と推定されているので、現在の解明率は30%かそれ以下にすぎない。

福岡県の昆虫は、目録が編纂されていないので正確な記録種数は不明であるが、日本産のおよそ3分の1前後と推定される。コウチュウ目では1988年現在日本産9131種、福岡県産3027種で日本産の33%、トンボ目では日本産の総種数が飛来未定着種も含めて197種、福岡県産89種で45.2%を占めるが、大分県や佐賀県の分布状況からあと数種の追加が期待できる。熱帯に大部分の種が分布し、日本が分布の北限にあたる仲間では南西諸島に種数が多く、ゴキブリ目では日本産52種で福岡県産9種、シロアリ目では日本産22種で福岡県産5種と福岡県産の割合が低い。

カテゴリーと選定基準

コウチュウ目等昆虫の希少種選定にあたって、つぎの基準を考慮した。

1. 種の情報が正確な同定に基づいていること

- a. 古くからよく知られた顕著な種で、混同する近似種がないこと（例：ベッコウトンボ、ダイコクコガネ）
- b. 図鑑類や同定参考書類によく掲載されており、顕著な特徴で正確に同定されてきたもの（例：ムカシトンボ、スジゲンゴロウ）
- c. 一般同好者の収集対象となり、比較的情報量の多いもの（例：ムナコブハナカミキリ、ルリクワガタ）

2. 福岡県で最近減少しているもの

- a. もともとの希少種は除外。昆虫には原記載以降数十年も記録のない種がかなりあり、また元来個体数の少ない希少種も多いので、これらの大部分を除外した。
- b. 絶滅危惧種を選定。福岡県を対象に、10～30年以前の状態から非常に減少している種や最近急激に減少しつつある種を選考対象とした。

3. 上記にかかわらず福岡県での分布が生物学的に重要なもの

- a. 福岡県を原産地として記載された顕著な希少種（例：ヒコサンオオズナガゴミムシ、スネケブカヒロコバネカミキリ、オオカマキリモドキ）
- b. 福岡県での分布が貴重な希少種（例：アイヌハンミョウ、フトネクイハムシ、タカハシトゲゾウムシ）

カテゴリーの区分は、「環境庁のレッドリスト・無脊椎動物（2000）」に準拠し、主として定性的要件によって下記のとおり行った。

1. 絶滅（EX）：福岡県ではすでに絶滅したと考えられる種。
2. 絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）：近い将来において絶滅の可能性が高い種。
3. 絶滅危惧Ⅱ類（VU）：絶滅の危険が増大している種。
4. 準絶滅危惧（NT）：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種。
5. 情報不足（DD）：評価するだけの情報が不足している種で、福岡県固有種や分布上の貴重種なども含めた。

重要なハビタット

コウチュウ相などの一般的特徴：福岡県のこれら昆虫は、海岸地域の低地を中心とした東洋区系（南方系）の、また英彦山や脊振山系などの産地には旧北区系（北方系）の昆虫が混在分布するが、ほとんどの種は西日本共通で、地域分化の激しいオサムシ科などでは固有の種が分化している。また、九州大学とその付属の彦山生物学研究所の教官や学生らによって分類学的研究が多数報告されていることから、多くの種の原因産地となっている。福岡県を分布の北限とする種には、ヒメミツギリゾウムシ（沖ノ島）、クロアシホソミツギリゾウムシ（英彦山）、ワタナベコマユバチ（英彦山）などがあり、分布の西限とするものにチッチゼミ（英彦山）、ミナミコルリクワガタ（福智山、障子岳）、スナムグリヒョウタンゾウ（北九州市の砂浜）などが知られている。

最近のコウチュウ相の単純化と衰退は以下のようなハビタットの変化によるものである。

天然林の減少と人工林の増加：昭和30年代からはじまった拡大造林と燃料革命によって、天然林や広葉樹林、薪炭林は減少し、スギとヒノキの人工林が増加した。これら林の伐採後は伐採木、枯枝、伐根などの放置によってまず食材性の、ついで腐朽材やこれに発生する菌食性の昆虫が増加したため、コウチュウなどは一時的に増加して絶好の採集場所となり、福岡県では英彦山、障子岳、犬鳴山、九千部山、熊渡山などが有名である。しかし、スギなどが生長して林地を閉鎖する頃からこれら昆虫類は急激に減少し、また、伐採後の地表の乾燥と閉鎖後の林床植物の消滅も昆虫の衰退に拍車をかけた。

河川、水田、池などの減少と水環境の悪化：(1) 農薬の大量散布。昭和27年頃から始まった水稻害虫に対する農薬の一斉大量散布は水田と周辺の池や溝などに生息するゲンゴロウ、ホタル、タガメなどで代表される水生昆虫に壊滅的な影響を与え、当時最も普通であった多くの昆虫が絶滅危惧の状態まで減少した。(2) 河川改修工事。戦後相次いで発生した水害に対応するため、河川改修が強力に進められた結果、護岸工事で川岸はコンクリートで固められ、水草類は除去されて、ホタルやトンボ類など多くの昆虫が生息できなくなった。(3) 山地での工事による土砂の流入。道路や林道の建設など山地での工事に伴って大量の土砂が河川に流入し、出水のたびにくり返される土砂流や水底の攪乱によって、渓流性昆虫は大きな打撃をうけ、ゲンジボタルやムカシトンボ、渓流性のゲンゴロウ類などが減少した。(4) 排水による水質の汚染。工場排水や家庭からの排水など各種化学物質の流入や富栄養化によって多くの水環境で水質は悪化し、水生昆虫は更に大きな影響を受けた。(5) 埋立による水環境の減少。宅地や工場用地、道路建設などに伴って水生昆虫の生息地そのものが各地で減少し、キイロネクイハムシは日本最後の生息地が宅地化によって絶滅した。

自然海岸と河口の減少：海岸と河口部に限って生息するハンミョウ類は生息できなくなった。

農林業形態の変化に伴う衰退：養蚕業の衰退とともに桑畑が減少し、かつてはクワの有名な害虫であったトラフカミキリも著しく減少している。また、牛馬の減少によって、糞に生息するダイコクコガネやツノコガネが福岡県では採れなくなっている。炭焼丸太や薪などに多く、シイタケほだ木の害虫であったミドリカミキリも、最近ではこのような餌木の減少で採集が困難になっている。

同好者の採集圧：圧倒的に同好者の多い昆虫のなかには、徹底的な採集によって生息密度が低下したものがあり、その代表例として、英彦山のルリクワガタ類の生息地では朽ち木が完全に破壊されて幼虫まで根こそぎ採集されている。また筑後平野のオオクワガタが生息する大径木では心材の腐朽部までが暴き出される状況である。

(森本 桂)

調査協力者：上野俊一、野村周平、宮本正一

キイロネクイハムシ

コウチュウ目 ハムシ科 Chrysomelidae

学名: *Macrolea mutica japona* (Jacoby)

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 日本で最初に採集された1880年以降、現在までに7カ所で少数個体が採集されただけで、1962年に福岡市香椎で採集された1頭が日本での最後の記録となり、その後の徹底した調査でも発見されていない。福岡での採集地は香椎高校奥の小さな池で、現在は住宅になっている。キイロネクイハムシの既知産地はいずれも平地から低山地で人間生活圏に近いことから、埋立や水質汚染などの影響で生息環境が失われた結果絶滅したと推定される。

分類・形態: 本種を含むキイロネクイハムシ属はヨーロッパから日本にかけて5種1亜種が分布し、ミズギワハムシ亜科の中では、脚の付節が円筒形で、第3節は2裂しないことと、爪が直角に開くことで北米の *Neohaemonia* 属に近似する。日本産は独立種とされてきたが、Medvedev(1982)によってヨーロッパからシベリアにかけて広く分布する *mutica* の亜種とされ、木元(1994)もこの扱いにしたがっている。

体長は4.2~4.5mmで、体の腹面は黒く、背面は黄褐色で、頭部、触角、および前胸の3筋は黒い。上翅端の外角は棘状に突出する。ハムシ科のほとんどは、脚の付節が多少とも扁平となって下面に短毛が密に生え、幅広い第3節は先端中央で深く切れ込む

特徴を持つが、キイロネクイハムシ属は例外で、付節は第1節から第3節まで円筒形で下面にほとんど毛がない。

分布: (県内) 福岡市香椎で記録された。

(県外) 現在までの採集記録として、横浜市、沖縄本島、千葉県松戸市、兵庫県西宮市、兵庫県宝塚市、琵琶湖、および泥炭中の生物遺体として東大阪市の約650年前の地層と山梨県忍野の約6000年前の地層がある。日本では同好者によって熱心な調査が行われているにもかかわらず、福岡の記録以降は採れていない。

(国外) ロシア沿海州、中国遼寧省、甘肅省(?), 江蘇省。原亜種はヨーロッパからシベリアにかけて広く分布するが、生息地は離れて点在している。

生活史・生態・生息地: 日本での採集記録から、本種もほかのネクイハムシ同様水質のよい池や沼などでスゲやヒルムシロなどの水生植物を食べ、成虫は水際の茎に静止し、幼虫は根を食べていたと推定される。ちなみにヨーロッパ産の原亜種は、北海沿岸近くでヒルムシロの仲間を食べるといふ。松戸市ではカエルの、また琵琶湖ではホシハジロの胃袋から見つかっている。

(森本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

アイヌハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科 Cicindelidae

学名: *Cicindela gemmata aino* Lewis, 1891

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山の古い記録以降、県内では少なくとも50年以上採集されていない。本種の生息する環境は、護岸工事や河川改修によって破壊されやすく、県内における本種の生息状況は危機的である。

分類・形態: 体長16~17mm。体背面はつやのない緑色で、上翅にはクリーム色の斑紋がある。斑紋パターンは、平地から山地にかけて普通に見られるニワハンミョウに似るが、本種の翅端の紋は会合線付近で最も太くなることで区別できる。体下面は、緑青色の金属光沢を具える。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道~九州, 対馬。九州では熊本, 佐賀などから記録があり, 近年では脊振山系の麓にあたる佐賀県富士町畑瀬から記録されている。

(国外) 朝鮮半島, 中国, シベリア南東部

生活史・生態・生息地: 主に春に出現。河川中流域の砂質の川原で見られるが, 局地的である。全くの砂地よりも, 石が転がっていたり草が生えている川原を好む。佐賀県富士町では, 川原に転がる大きな石の下に潜んでいる個体が多数観察されており, 石下にすむゴミムシ類を捕食することが示唆されている。

(藤本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ルイスハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科 Cicindelidae

学名: *Cicindela lewisi* Bates, 1873

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では行橋市長井浜の記録と福岡市産の古い標本があり, 1950年代まで生息していた志賀島勝馬川河口は護岸工事によって絶滅している。本種の生息地は護岸工事などでつぎつぎに消滅している。

分類・形態: 体長15~18mm。体背面は緑~黒色で, つやがない。上翅は密に顆粒を装い, クリーム色の特徴的な模様様の斑紋が見られる。体下面は青紫色の金属光沢を有する。中脛節の先端半分は, 密に白色剛毛を装う。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州 (中部地方以西)~九州, 壱岐, 五島列島 (福江島)

(国外) 朝鮮半島, 濟州島, 中国北部

生活史・生態・生息地: 成虫は春~秋にかけて出現。大河川の河口や干潟, 砂浜など, 砂泥質の海岸の波打ち際に生息し, 小さな節足動物などを捕食する。

(藤本)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

ナカオメクラチビゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名：*Trechiana nakaoi* S.Uéno, 1972

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：北九州市足立山の標高120m地点にある一つの谷間だけが生息地として知られている。この谷は下方に住宅地が造成され、また上方には砂防ダムが建設されて水が干上がった状態となっているため、絶滅の可能性が極めて高い。

分類・形態：本種を含むメクラチビゴミムシ属には、北海道から九州まで100種以上が知られるが、九州には本種のみが分布し、足立山が属分布の西限となる。体長6.0～6.5mm。体色は茶褐色で、ほかのメクラチビゴミムシ類に比べやや黒っぽい。複眼は完全に消失する。前胸背板は垂心臓形で、後角には

毛がある。上翅の第3条、第5条にそれぞれ2個の孔点があり、各1本の長い剛毛を生やす。

分布：（県内）足立山の特産種

生活史・生態・生息地：多少とも湿り気のある、谷間の大きな石下や、土中のすき間、落ち葉下から採集されているが、その範囲は非常に局地的である。地下浅層付近の、一定の温度と湿度の保たれた環境に生息するものと思われる。冬季、ほかのゴミムシ類が越冬している時も、盛んに活動していた例が報告されている。

（藤本）

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

ドウイロハマベゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名：*Pogonus itoshimensis* Habu, 1954

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1952年6月に前原町（現前原市）で採集され、その後1982年に行橋市で灯火に飛来した個体が採集されているのみである。本種が生息するのは、海浜の藍藻類が堆積する特殊な環境であるため、護岸工事や開発による生息地破壊の恐れがある。

分類・形態：体長5.6～7.4mm。光沢のある緑銅色で、上翅端部分のみがわずかに黄色くなる。国内では近縁のハマベゴミムシが知られ、同所的に見られることもあるが、体形（本種の方がより丸い）や体色によって容易に区別できる。雄交尾器の形態も異なる。

分布：（県内）行橋市、前原市

（県外）北海道、本州（山口）

（国外）ロシア

生活史・生態・生息地：山口県阿知須干拓地では、ハマベゴミムシと同じ場所に生息する。塩分の含まれる水たまりの水際の *Lyngbya* 属の藍藻の下から多くが得られており、周囲の植物の根際や砂中からも得られている。近縁のハマベゴミムシよりも、日陰の部分をより好むという。また、水たまりに沈めたところ、水底を歩き、水中の落ち葉下に隠れた例も報告されている。灯火にも飛来する。

（藤本）

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

クビナガキベリアオゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Chlaenius prostenus* Bates, 1873

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1980年8月に行橋市泉で灯火に飛来した1頭のみが記録されている。県内では、本種の生息に適した環境が護岸工事や開発によって著しく破壊されており、本種の生息状況も危機的と思われる。

分類・形態: 体長11~12.5mm。前胸背板は金属光沢のある緑色で、幅広い。また、側縁は黄色く縁取られる。上翅は第8間室の中央から外側が黄褐色に縁取られる。腹部は褐色で、黒くならない。近似種のヒメキベリアオゴミムシとは、上翅の黄褐色部分の幅や腹部の色彩から容易に区別できる。

分布: (県内) 九州での記録は、行橋市のみ

(県外) 本州, 九州

(国外) 中国

生活史・生態・生息地: 本種が生息するのは、護岸されていないため池の周辺や湿地で、湿地や水辺に特有の植物が豊富に見られる環境である。千葉県東金市では夏季の夜間に、ミゾカクシが水辺まで密生している環境で歩行中の個体が多数採集されている。灯火にも飛来する。また千葉県三崎町では、湿地に接した粘土質の崖の割れ目で、越冬中の成虫が多数採集されている。

(藤本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

オオヒラタトックリゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Oodes virens* (Wiedemann, 1823)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山, 田主丸町, 杷木町, 吉井町, 北九州市福智山で採集されたが、最近の40年間採集報告がなく、全国的にも近年の採集例はまれである。激減の原因として、河川改修やため池の護岸工事による生息環境の破壊、害虫駆除のための農薬散布や誘蛾灯の使用が考えられる。

分類・形態: 本種は日本産のトックリゴミムシ属中最大で、体長15~17mm。体は平たく黒色。時に上翅はかすかな金銅光沢を帯びる。上翅第8間室は極めて幅狭く、前部は隆状となる。前脛節外縁に細い条

溝がある。近似種が多く、同定には注意が必要である。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州~九州

(国外) 東南アジア, フィリピン, インド, スリランカ

生活史・生態・生息地: 本属は一般に湿地やため池, 水田などの水辺周辺に生息するが、本種に関しては詳細は不明。

(藤本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ヒコサンセスジゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Copelatus takakurai* Satô, 1985

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1973年に英彦山の豊前坊付近の杉林内において、降水時だけ水の流れる溝で採集された標本を元に新種として記載されたもので、その後30年近く、県内での記録は全くない。

分類・形態: 本種を含むセスジゲンゴロウ属は、いずれの種も上翅に5~10条のはっきりとした条溝を具える。体長4.6~5.1mm。体形は、細長い逆長卵形で、扁平である。背面は、暗褐色で細かく点刻され、前胸背板は、前縁に沿って不規則な点刻列を配し、後角付近には、短い縦じわを有する。上翅は、6条の条溝を具え、基部には幅広い比較的明瞭な黄褐色

帯を有する。間室は、雄では光沢があるが、雌では密な縦じわを有するため光沢がほとんどない。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 九州(佐賀, 大分, 熊本, 宮崎), 屋久島。

生活史・生態・生息地: 成虫や幼虫の生活史や生態については、ほとんどわかっていない。生息地は、今にも干上がりそうな畑の脇の排水用に掘ってある溝や林の中の水たまりや溝などのような、非常に不安定な浅い水域である。そのため、安定した生息地は非常に少なく、既知の産地に行っても水が干上がっていることも多い。

(松井)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Cybister japonicus* Sharp, 1873

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1940年代までは県内に広く分布していたと見られ、福岡市、田川市、若松区などの記録があるが、その後、少なくとも50年以上は全く記録がない。北海道や本州では、まとまって得られる地域も多いが、農薬散布・ほ場整備・池沼や湿地の埋立や護岸などによって、かつての生息環境が破壊されたことで、九州では激減しており、福岡県では絶滅した可能性もある。

分類・形態: 体長約33mm~42mm。背面は緑色~褐色を帯びた暗褐色で、雄は強い光沢があるが、雌では光沢が弱い。前胸背板から上翅の側縁部は、淡黄色に縁取られる。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道, 本州(青森~山口), 四国(徳島,

高知), 九州(宮崎を除く各県), 佐渡島, 対馬, 屋久島, 西表島

(国外) 台湾, 朝鮮半島, 中国, シベリア

生活史・生態・生息地: 成虫は、主に弱った魚や動作の鈍い水生昆虫などを捕らえ、強力な顎でかじり取って食べる。幼虫は、終齢では80mmにも達し、動くものは何にでも反応して大顎で捕らえ、消化液を送り込み、消化して吸い込む。成虫で水中越冬し、翌春~夏に水草の茎に穴を開け、1個ずつ産卵する。卵は2週間ほどで孵化し、約2カ月で成虫になる。蛹化は土中で行われる。成虫は、通常2~3年は生きるようである。生息地は、主に平野部から山間部の水草の多い池沼, 水田, 休耕田や湿地などである。

(松井)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

マルコガタノゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Cybister lewisianus* Sharp, 1873

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1930年代に「福岡」という分布記録があるのみで、その後少なくとも60年以上全く記録がない。九州では、熊本県の天草下島だけで生息が確認されている。

分類・形態: 体長約21mm~26mm。体は卵形で、比較的厚みがある。背面は、緑色~褐色を帯びた黒色で雌雄ともに強い光沢がある。触角・口肢・脚は、黄褐色である。上翅には、3条の点刻列がある。腹面は主に黄色~黄褐色で強い光沢があり、後胸前側板・各腹節側方などは黒い。前胸背板から上翅の側縁部は、淡黄色に縁取られる。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州(青森~広島)、四国(徳島)、九州(熊

本の天草下島)

(国外) 中国, インドシナ半島など

生活史・生態・生息地: 成虫は、主に弱った魚や動物の鈍い水生昆虫などを捕らえ、強力な顎でかじり取って食べる。幼虫は動くものは何にでも反応し、大顎で捕らえ、消化液を送り込み、体外消化して吸い込む。成虫越冬で、水中から出て落ち葉の下や土中などで越冬するものと思われる。越冬成虫は4~7月に水草の茎に穴をあけ、1個ずつ産卵する。孵化した幼虫は約2カ月で成虫になる。成虫は、通常2~3年は生きようである。生息地は、主に平野部の水草の多いため池である。

(松井)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

マルガタゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Graphoderus adamsii* (Clark, 1864)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1940年代までに行橋市、福岡市、筑紫野市二日市の記録があるだけで、その後50年以上全く採れていない。九州では、熊本県の南阿蘇地域で現在も生息が確認されているが極めて局所的であり、個体数も少ない。現在、福岡県に生息している可能性は極めて低い。

分類・形態: 体長約12mm~14.5mm。雌雄ともに光沢がある。頭部は黄褐色で、頭頂のV字紋と後頭部は黒色。前胸背板も黄褐色で、前・後縁には幅広い黒帯を具える。全面に不規則な浅い縦じわがあり、雌では両側方で深い縦溝となる。上翅は、細かく点刻され、黒色の網目状文様があり、3条の点刻列がある。腹面は、主に暗黄褐色~暗赤褐色である。前胸背板から上翅の側縁部は、淡黄色に縁取られる。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道(北端部を除く)、本州(青森~山口)、四国(徳島)、九州(大分、熊本、宮崎)

(国外) 中国, 朝鮮半島など

生活史・生態・生息地: 成虫の寿命は、1年ほどであり、ゲンゴロウ属の2~3年に比べるとかなり短い。生息地は、主に平野部から丘陵地の水草の多いため池、水田、休耕田や湿地などである。灯火にも飛来する。しかし、近年のため池の埋立や護岸、ほ場整備、農薬散布などによって、かつての生息環境は破壊されたりしており、神奈川県では、既に「絶滅種」として扱われている。

(松井)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

スジゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Hydaticus satoi* Wewalka, 1975

カテゴリー: 絶滅危惧 I 類 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 1928年から1958年にかけて福岡市、若松区、南筑後、篠栗町、英彦山、田川市、筑紫野市二日市から記録されているが、その後40年以上採れていない。

分類・形態: 体長12~14.5mm。体は卵形で、背面はやや隆起し、光沢がある。腹面は赤褐色で網目状印刻を有し、光沢が弱い。背面は黒色で頭部前方、前胸背板側方、上翅の2列の縦条は、黄褐色である。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州(神奈川~山口)、四国(愛媛、高知)、

九州(宮崎を除く各県)、対馬、屋久島、トカラ列島中之島

(国外) 台湾、中国、ボルネオ、フィリピン、ブータン、ネパール、インド、スリランカなど

生活史・生態・生息地: 生息地は、主に平野部から山間部の水草の多い池沼、水田、休耕田や湿地などの比較的浅い水域と思われるが、生活史や生態についての詳しい研究がなされないまま全国的に姿を消してしまった。

(松井)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ダイコクコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名: *Copris ochus* Motschulsky, 1860

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 本種は牛馬糞に集まる大型の糞虫で、英彦山、福智山、福岡市などの記録があるが、最近40年以上採集されていない。九州では現在も阿蘇や久住、佐賀県馬渡島の放牧地には生息しているが、県内で放牧地のある油山や大島の最近の調査では発見できず、牛馬の減少とともに本種の生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態: 日本産食糞性コガネムシの最大種で、雄の頭部と前胸にある角で顕著な種である。頭部は半円形で、雄には長い角状突起がある。雄の前胸背板には1対の突起があり、大型のものでは長く角状に発達する。雌は頭部に板状の横隆起が、前胸背板

に両端が突出した横隆起がある。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道~九州、佐渡、伊豆諸島、壱岐

(国外) 朝鮮半島、中国、モンゴルなど

生活史・生態・生息地: 成虫は放牧地の大型獣の糞に集まり、糞の下に穴を掘って糞塊を地中深く運び入れ、球形に丸めてから産卵する。母親の雌はこの穴に留まり、幼虫が育つまで糞塊に発生するカビやハエの幼虫を除去して世話をする。灯火にも飛来する。

(城戸)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

キンスジコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名：*Mimela holosericea* (Fabricius, 1789)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では1960年と1980年に八女郡熊渡山から記録されただけである。大型の美しい種でありながら、英彦山や福智山など、比較的調査の行き届いている山地からの記録はない。また、全国的にも珍しい種であって記録は少ない。県内では唯一の産地である熊渡山一帯が現在では山頂のごく狭い部分を残してスギやヒノキの人工林となり、原生林はほとんど消失して当時の面影はなくなっている。元来が少ない種であり生態もほとんどわかっておらず、その生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態：本種を含むスジコガネ属は、日本から11種が知られているが、本種は前胸背板と上翅が密に強く点刻され、独特の黄緑色の金属光沢を放つことで容易に区別できる。上翅の縦隆条は第1条だけ

が幅広く明瞭であるが、時にこの第1条もほとんど消失する。腹面は、緑光沢のある銅赤色で、長細毛を疎生する。脚は黄褐色で、各脚の爪は先端に切れ込みを欠く。

分布：（県内）熊渡山

（県外）北海道～九州。近くでは大分、熊本、宮崎の高山地域

生活史・生態・生息地：成虫は、7～8月頃山地に見られ、植物を食害しているものを見るより日暮れ前に林道などを低く飛翔しているものを捕らえることが多い。灯火にも飛来するが、夕暮れからの薄明かりの時間帯だけで、深夜には来ない。幼虫は、植物の根を加害しているという。

（城戸）

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

トラハナムグリ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名：*Trichius japonicus* Janson, 1885

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1949年に宮田町で採集された1頭だけが唯一の記録である。本種は九州では極めてまれで、北日本では少なくない種である。そのような種が宮田町のような低山地ばかりの地で採集されたことは注目すべきことであるが、その付近がほとんどスギとヒノキの人工林となり、また平地は工業団地などになった現状からみて、本種の生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態：本種は顕著な色彩と斑紋をもち、背面は淡黄褐色の毛で覆われるが、前胸背板と尾節板は長く密な毛で覆われる。前胸背板は、中央でゆるく曲がる。上翅には3対の黒紋があるが、暖地のもの

は後紋を残して紋が小さくなるという。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）北海道、本州、佐渡、四国、九州に分布するが、かなり局地的である。九州では鹿児島市、熊本県椎矢峠の記録がある。

生活史・生態・生息地：成虫は5月頃から山地の花に集まる。成虫は朽ち木に産卵。幼虫は朽ち木の中を食べ進み、その中で蛹化、成虫となる。福岡県で採集された個体はアザミの花で、また熊本県椎矢峠では、ノリウツギの花で採集したとの記録がある。

（城戸）

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

アカマダラコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名: *Poecilophilides rusticola* (Burmeister, 1842)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 本種は、かつては珍しいというほどの種ではなかったようで、若杉山、宮田町、英彦山、香春岳、足立山、篠栗町、福岡市松崎、能古島、天拝山、久留米市、田主丸町、熊渡山、大牟田市など平地を中心に各地から記録された。しかし、これらはすべて1960年代初頭までで、それ以降は、1972年山川町、1986年城山、1992年福岡市今宿で採集されただけである。本種はかつて各地の里山のクヌギ林で、カナブンなどに混じってよく採集されたものである。里山のクヌギが次々と伐採され宅地などに変わるにつれ、本種も見られなくなった。平地のクヌギなどの樹液に集まる本種の生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態: この属には日本から本種のみが知られており、別亜種が済州島、朝鮮半島、シベリア東部、

中国、モンゴルに分布する。赤褐色で、小黒点を散在し、ろう状の光沢がある。上翅には、9~10条の縦条がある。特異な色彩で他種から容易に区別できる。

分布: (県内) 山川町、城山、福岡市今宿

(県外) 本州~九州。福岡近辺では熊本県天水町、菊池溪谷などの記録がある。古い記録が多く、最近の記録は見当たらない。阿蘇地方では、現在でも時折採集されている。

生活史・生態・生息地: 成虫は6月頃、平地や里山のクヌギ林の樹液に見られる。幼虫はもろくなった朽ち木や腐葉土中で腐った植物質を食べるものと思われる。

(城戸)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

アトコブゴミムシダマシ

コウチュウ目 アトコブゴミムシダマシ科 Zopheridae

学名: *Phellopsis suberea* Lewis, 1887

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山、障子岳、鷹ノ巣山、熊渡山から記録されている。大型種であり、同定もたやすく、また、珍しい種であるにもかかわらず、1978年以降の記録はない。本種が生息するのは、高山の良好な自然林の残された地域で、大型のサルノコシカケなどのキノコに集まるため、森林が乾燥すると本種も見られなくなる。自然林の減少とともに本種の生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態: アトコブゴミムシダマシ属は、日本からは本種のみが知られている。黒色で、褐色の小鱗毛を密生していて褐色に見える。頭は粗大顆粒を装う。前胸背板に数本の縦の隆条や凹陷がある。上翅には、粗大点刻列があり各上翅中央から後方に向か

い大隆起条があり、その後方部および翅端部は強くこぶ状に隆起する。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州~九州に分布するが、かなり局地的である。九州では九重山地や九州中央山地などに分布。**生活史・生態・生息地:** 成虫は山地のコブキササルノコシカケなどの大型の菌類に集まる。英彦山では、アラゲカワラタケに産卵したものが観察されている。熊渡山では、アカガシの立ち枯れ樹皮下に見られた。幼虫は多孔菌を食べ、その中や朽ち木中で蛹化する。

(城戸)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

オオモンキゴミムシダマシ

コウチュウ目 ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae

学名: *Diaperis niponensis* Lewis, 1887

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1959年英彦山から、また1963年に障子岳からも記録された。障子岳ではその当時伐採地で少なからず採集されたという。この記録以後、県内での記録はない。本種が生息するのは、高山の夏緑樹林帯などの良好な自然林の残された地域である。自然林の荒廃がすすみ、自然林そのものも減少しており、本種の生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態: 体長19mm内外。黒色で強い光沢がある。頭はしわ状で、中央が広くくぼみ、前方は隆起する。眼は大きく、触角各節は内側へ広がり横長。前胸背板はやや密に点刻され、中央部はよく隆起し側縁は張り出し平圧される。上翅には点刻列があり、間室

は平たく小点刻を散布する。上翅帯状斑紋は基部と後方にあり、橙黄色。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道~九州に分布するが、山地帯に局地的に分布し個体数も少ない。福岡近辺では九重山地や九州中央山地からわずかな記録があるが、最近では採れていない。

生活史・生態・生息地: 6~8月頃、成虫、幼虫ともに山地のツガサルノコシカケなどの大型の多孔菌に見られる。幼虫は菌の内部を食べながら成長し、その中で蛹化する。灯火にも集まる。

(城戸)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

オニホソコバネカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名: *Necydalis gigantea gigantea* Kano, 1933

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山の稚児落として吹き上げられた1頭が1930年7月に採集されただけで、その後60年以上採集されていない。広葉樹大木の芯腐れや立ち枯れに産卵するので、自然林の伐採が本種の生息に与えた影響は大きく、かなり危機的な生息状況と思われる。

分類・形態: 上翅は黒くて短く、腹部と後脚は細長くて、動作を含めてある種のハチに擬態する。北海道産、本州産、九州産でそれぞれ形態に差異が見られる。体長16.5~34mm。雄では第3~5腹節、雌では第2~5腹節が黒色。上翅には暗色の短毛が密に生える。英彦山産は、前胸背板の隆起が弱く、触角が長く長い点で、本州産との間に差異が見られるという。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道~九州に分布。九州ではほかに、大分と宮崎で記録があるが、いずれも1例のみ。屋久島には別亜種が分布。

生活史・生態・生息地: 夏に出現。飛翔中のもののほか、クワの古木、ダケカンバ立ち枯れ、ケヤキ腐朽部からの採集例が報告されている。クワの花を訪れた例もある。クワ大木での観察では、幼虫は材の中心部がコルク状に枯死した部分だけを食べて育ったという。ほかの広葉樹に産卵された場合も、幼虫は大木の、やや乾燥した芯腐れ部分を食べるものと思われる。

(藤本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ヨツボシカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名: *Stenygrinum quadrinotatum* Bates, 1873

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: かつては普通に見られ、田川市、赤池町、赤村、英彦山、福智山、若杉山、笠置山、城山、福岡市、春日市、津屋崎町、高良山、久留米市、大牟田市、北九州市と、平地から低山地まで幅広く記録されている。しかし、そのほとんどは1970年代以前の採集例で、1980年以降は、1985年久留米市、1986年北九州市門司区の2例しか採集されていない。国内では各地で減少が指摘されている。減少の原因としては、各地の雑木林（主にクヌギ、コナラ、クリ林）の伐採、宅地化が考えられるが、それだけでは説明できないほどに減少の度合いは顕著である。

分類・形態: 体長8~14mm。体は赤~暗赤褐色で、

上翅の中央~前方に4つの明色紋がある。中、後腿節は強く肥大する。

分布: (県内) 久留米市、北九州市門司区

(県外) 北海道南部~四国、九州、小豆島、対馬、壱岐、屋久島、奄美大島、徳之島など

(国外) 台湾、朝鮮半島からインドシナまで

生活史・生態・生息地: 初夏~盛夏にかけて出現、夜は灯火に飛来し、昼間は特にクリの花に好んで集まる。幼虫は、クヌギ、コナラ、クリなど、各種広葉樹の枯れ枝内部を食べて育つ。県内では、クヌギ枯れ枝より羽化脱出した例が報告されている。

(藤本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

フトネクイハムシ

コウチュウ目 ハムシ科 Chrysomelidae

学名: *Donacia clavareui* Jacobson, 1906

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 生息場所の消失、改修工事や汚染などによって既知産地が減少している。本種は関東から東北にかけて点々と採集されているが、県内では宮田町で1948年に11頭が、また1995年に嘉穂町の遠賀川畔で2頭採集されただけである。

分類・形態: 体と脚の大部分は銅色光沢のある黒色で、前胸背板に剛毛が密生する。体長7.5~9.0mm。

分布: (県内) 嘉穂町

(県外) 本州 (青森、宮城、福島、栃木、茨城)

(国外) 中国、シベリア、モンゴル

生活史・生態・生息地: ネクイハムシの仲間は、池や沼などに生息し、成虫はスゲや水生植物を食べ、幼虫はこれらの根を食べることが知られている。本種は成虫がウキヤガラ、アゼスゲ、ホタルイから採れており、またカサスゲの花に集まる記録があり、5月上旬から7月上旬まで採集されている。

(森本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

キンイロネクイハムシ

コウチュウ目 ハムシ科 Chrysomelidae

学名: *Donacia japona* Chûjô & Goecke

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 本州では青森から島根, 広島までの記録があるが, 九州ではまれで, 福岡市の古い記録と嘉穂町百々谷, 佐賀県七山村檜原湿原の記録だけである。生息場所の消失が本種の減少に関係していると推定される。

分類・形態: 暗緑色で銅色の強い光沢があり, 上翅には横じわがあり, 中央には赤銅色の顕著な縦長の筋紋がある。体長7.5~9.0mm。

分布: (県内) 嘉穂町

(県外) 北海道, 本州 (青森から島根・広島までの各地), 九州 (佐賀)

(国外) 朝鮮半島, 中国東北部

生活史・生態・生息地: フトネクイハムシと同様湿地やため池などの水草に生息し, 成虫はミクリ, ヤマトミクリ, ヒメミクリ, スゲの一種, カンガレイを食べ, ミクリ, カサスゲ, アゼスゲなどの花に集まり, 幼虫はミクリ類の株を食べる。

(森本)

絶滅危惧 I 類 (福岡県)

ホッケミズムシ

カメムシ目 ミズムシ科 Corixidae

学名: *Hesperocorixa distanti hokkensis* Matsumura, 1905

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 古くは各地の水田や貯水池などに多かったが, 県内では1963年以降記録は少なくなり, 1994年に福岡市西区で採集されたのが最後の記録である。

分類・形態: 体長9.5~11.5mm。中脚は長く, 発達した2本の爪があり, 後脚は内側に毛列があって遊泳脚となる。本亜種はミズムシの1亜種であり, 関東以西を本亜種としている。前胸背の黒色横帯は9~12本で, 表面に顕著な細いしわがある。

分布: (県内) 福岡市西区

(県外) 本州, 九州

生活史・生態・生息地: 幼虫は水中で生活し, 成虫はときどき水面に浮かび, 頭部と前胸背で水面の表面膜を破って翅下に蓄えた空気を更新する。単細胞藻やワムシ, 糸状藻などを吸収し, またボウフラやユスリカ幼虫を捕食する。越冬した成虫は3月頃に産卵を始め, 新成虫は6月に出現する。

(紙谷)

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

オオミズムシ

カメムシ目 ミズムシ科 Corixidae

学名：*Hesperocorixa kolthoffi* (Lundblad, 1933)

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、1960年代に福岡市六本松で採集されただけである。

分類・形態：体長10～12mm。前胸背の黒色横帯は10本で、表面の細じわは非常に弱い。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州，九州

（国外）朝鮮半島，中国

生活史・生態・生息地：生態はホッケミズムシと同様で、生息地では群生することがある。

（紙谷）

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

トゲナベブタムシ

カメムシ目 ナベブタムシ科 Aphelocheiridae

学名：*Aphelocheirus nawai* Nawa, 1905

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1950年代に那珂川，星野川，矢部川で採集された標本があり，1940年代には筑後川流域からも記録されている。かつては宝満川に多産したが，1960年代に土砂流入と水質汚濁で絶滅した。

分類・形態：体長8.5～10mm。腹背腺開口間隔がその腹節幅の7分の1である点と，前胸背の側角がとがる点が，近似種のナベブタムシとの大きな区別点である。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州，九州

（国外）朝鮮半島

生活史・生態・生息地：砂礫の多い溪流にすみ，佐賀平野では，溪流ではなく流れの緩やかなクリークで発見されている（ただし，川底は砂礫質で水質は非常によい場所である）。表面にある微毛によって薄い空気層が常に体を包んでいるので，これを通して水中の溶存酸素を取り込むことができ，全生涯を水中で生活できる。吻は非常に長く，トビケラ類の幼虫や蛹を捕食する。

（紙谷）

絶滅危惧Ⅰ類（福岡県）

ベッコウトンボ

トンボ目 トンボ科 Libellulidae

学名：*Libellula angelina* Selys, 1883

カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：1970年代までは東北南部から四国、九州にかけて、広く分布していたが、最近急激に減少したので、環境庁は1994年に「日本希少野生動物種」に指定して採集を禁止し、静岡県磐田市桶ヶ谷沼と鹿児島県祁答院町蘭牟田池で保護増殖事業を行っている。県内では福岡市箱崎、古賀市千鳥ヶ池、飯塚市、大牟田市で採集され、田川市、方城町、赤池町、金田町から記録されている。最近では北九州市小倉南区砂原池、戸畑区仙水町と牧山海岸、若松区響灘埋立地と小竹コスモス街道埋立地、八幡西区浦の谷池などで記録され、干拓地や埋立地の浅い湿地で連続して発生している。

分類・形態：若い成虫は雌雄とも体は黄褐色で、成熟した雄はチョコレート色になる。前後翅とも前縁の先端近くの縁紋部、中央部および基部に靑甲色の大きな紋があり、これを結んでオレンジ色の帯がある。体長43～46mm、後翅長30～34mm。本種に似るヨ

ツボシトンボは、翅の斑紋は前翅の基部になく、前後翅とも縁紋部と中央の紋が小さい点で区別できる。

分布：（県内）北九州市など

（県外）宮城から鹿児島までの本州、四国、九州
（国外）朝鮮半島、中国

生活史・生態・生息地：平地のヨシなどが茂った池や沼に生息し、成虫は4月下旬～6月上旬に出現して、若い成虫は水辺の体色に似た枯れ草に好んでとまる。雄は縄張りを持ち、雌は単独で腹端で水面を叩いて産卵する。北九州市の海岸干拓地や埋立地などでは放置された場所に自然にできた浅い湿地で最近連続して発生しており、4月下旬から5月にかけて相当数の成虫が確認されている。

法令などの指定状況：日本希少動物種（環境庁）
（森本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

カワラハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科 Cicindelidae

学名：*Cicindela laetescripta laetescripta* Motschulsky, 1860

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：新宮町で1988年に1頭、福岡市海の中道で1992年に12頭採集されている。福岡市油山市民の森で1988年に採集されたが、本来の生息地から推定して人為的な移入の可能性もある。1998年に海の中道で、波打ち際から離れた、乾燥の激しい砂丘草原上で確認した。大型捕食性昆虫である本種が個体群を維持するには、海の中道のような広大な面積の砂丘草原が必要だが、こうした環境は開発事業などで全国的に激減しており、本種の生息も危ぶまれる。

分類・形態：日本産は上翅斑紋に地域変異があり、2亜種に分類される。九州産は現在のところ、原亜

種として扱われている。体長14～17mm。九州産はクリーム色の上翅に黒～緑色の特徴的な斑紋が見られる。

分布：（県内）新宮町、福岡市東区

（県外）石川以西の本州、九州の日本海沿岸。上翅の黒化が著しい別亜種が、北海道と新潟以北の日本海沿岸および太平洋岸に分布。九州では、佐賀県唐津からも記録があるというが、近年の採集例を聞かない。

（国外）朝鮮半島、済州島、中国、サハリン、シベリア東部、モンゴル

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

シロヘリハンミョウ

コウチュウ目 ハンミョウ科 Cicindelidae

学名：*Cicindela yuasai yuasai* Nakane, 1955

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、北九州市下曾根で1958年に海岸から3kmほど離れた民家の灯火に飛来し、1986年北九州市安屋護と1993年津屋崎町恋の浦海岸で採集された。また、1998年福岡市奈多海岸と2000年志賀島勝馬でも生息が確認された。本種が生息するのは、自然海岸の岩礁地帯であるが、勝馬では海岸に近い小道で発見されている。特殊で狭い環境に生息することから、護岸工事など、一見わずかな環境の変化でも個体群が絶滅する可能性がある。

分類・形態：体長9～12mm。体背面は緑～黒色。上翅の側縁部と翅端は細く白く縁取られる。雌の上翅には、中央付近に1対の光沢のある紋が見られる。

上唇には3歯を持つが、中央のものが両側より長い。

分布：（県内）北九州市、津屋崎町、福岡市東区
（県外）本州～九州、伊豆諸島、対馬、平戸島、屋久島など。福岡近辺では、佐賀県鎮西町や長崎県平戸島で近年も採集されている。

（国外）朝鮮半島

別亜種が奄美以南の南西諸島、台湾に生息する。
生活史・生態・生息地：春から秋に出現。海岸の岩礁地帯、およびその周囲の砂浜に生息する。波しぶきのかかる岩の上や湿った砂浜を飛翔するが、小石の多い岩礁では発見できないという。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ゴウヤメクラチビゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名：*Stygiotrechus miyoshiorum* S.Uéno, 1969

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1957年に田川市岩屋（ごうや）第Ⅰ洞で採集された合計6頭の標本を基に、新種記載された。岩屋第Ⅰ洞ではその後、1974年と1978年にそれぞれ1頭が採集されている。しかしそれ以後は採集されておらず、また岩屋に点在するほかの鍾乳洞からも発見されていない。岩屋第Ⅰ洞では、かつては個体数も多かったようであるが、洞内が整備され、照明設備ができてからは減少している。洞内の整備による乾燥化が本種の生息環境に大きな影響を与えた可能性がある。調査できないような洞内の狭いすき間で個体群を維持させているものと思われるが、過去と比べ生息域は大きく縮小したものと思われる。本属の種は、洞窟性生物の

中でも特に移動能力が小さく、また乾燥に弱い。生息環境の分断・縮小による絶滅も危惧される。また、洞の近くでは石灰岩の採掘も行われており、これも将来、本種の生息に影響を与える可能性がある。

分類・形態：体長2.5～2.7mm。平尾台のツツガタメクラチビゴミムシに酷似するが、本種の方がやや小さく、上翅はやや短い。更に、本種の上翅条溝は第1～4条まではっきりと認められる点で区別できる。雄交尾器の形態にも軽微な差異が見られる。

分布：（県内）田川市岩屋第Ⅰ鍾乳洞の特産種
生活史・生態・生息地：洞内の湿り気の多い場所で、石下から得られている。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

キバネキバナガミズギワゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名：*Armatocillemus aestuarii* S.Uéno & Habu, 1955

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：新種記載の際、「Fukuoka」で1953年に雌1頭が、また、1995年能古島で40年ぶりに灯火に飛来した個体が採集された。本種が生息するのは、河口や砂浜海岸の潮間帯であるが、県内ではこのような環境は、護岸工事などによる破壊が著しい。

分類・形態：体長4.5mm内外。名前のおり大顎は伸長する。頭部および前胸背板は茶褐色。上翅肩部は茶褐色で、中央部付近にも茶褐色の不明瞭な斑紋をもつ。後脚転節は長く腿節の3分の2まで達し、先端がとがる。

分布：（県内）能古島

（県外）本州（千葉県小櫃川以西）～九州。福岡を除き、すべて太平洋と瀬戸内海沿岸からの記録である。

生活史・生態・生息地：大きな河川の河口から、その周辺の潮間帯に生息する。南西諸島に生息する、近縁のミナミキバナガミズギワゴミムシでは、干潮になる前の3分の1ほど水につかった石を起こして採集されたという。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

イグチケブカゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名：*Peronomerus auripillis* (Bates, 1883)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：福岡市能古島で1993年と1994年に2頭が採集された。この2頭はいずれも、灯火で得られた個体である。その後県内からは記録されていない。本種の生息地は河川改修やため池の護岸工事などで失われやすく、本種の生息も危ぶまれる。

分類・形態：体長9～9.5mm。頭は平たく、粗くしわ状に点刻される。前胸背板両側の最広部はやや突き出し角ばり、後角は小歯状。上翅は通常緑を帯びた金銅光沢があり、黄色く細長い立毛に覆われる。上

翅条溝は深く、強く点刻され、間室は隆起し横じわ状に点刻される。触角は基部のみが黄褐色でほかは褐色。脚は黄褐色となる。

分布：（県内）九州では、能古島が現在知られている唯一の生息地である。

（県外）北海道～九州

生活史・生態・生息地：本種が生息するのは、河川敷や池沼の水際や湿地に生える、ヨシをはじめとした植物の根際である。灯火にも飛来する。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ムツボシツヤコツブゲンゴロウ

コウチュウ目 コツブゲンゴロウ科 Noteridae

学名：*Canthydrus politus* (Sharp, 1873)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1939年に「南筑後」からの記録があるだけで、その後、福岡県からは60年以上全く記録がない。近年のため池や湿地の埋立、護岸工事、ほ場整備や農薬散布などによって、かつての生息環境は破壊されたり汚染されたりしており、絶滅した可能性もある。

分類・形態：体長約2.4mm～2.6mm。体は卵形で、背面は、著しく膨隆し強い光沢がある。腹面はほぼ平坦となり、褐色～赤褐色で光沢がある。後胸前側板は中基節に達せず、中胸前側板は不明瞭。小盾板は認められない。前脛節の先端に湾曲した長い棘を1本具える。頭部・前胸背板は黄色～黄褐色である。上翅は黄色～黄褐色で、6紋が美しい基本型から無

紋型まであり、3条の点刻列がある。

分布：(県内) 近年の記録なし

(県外) 本州(福島, 静岡, 愛知, 三重, 大阪, 岡山), 四国(徳島, 高知), 九州(大分, 熊本, 宮崎, 鹿児島), 天草上島と下島。いずれの地でも局所的であるが、産地ではまとまって得られることもある。**生活史・生態・生息地**：生息地は、主に平野部の水生植物の多いため池の浅瀬、休耕田、湿地などである。成虫は、冬季には個体数が少なくはなるが、水中において1年中見られる。冬季に水辺の朽ち木下で越冬中の個体が観察された例もある。

(松井)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

テラニシセスジゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名：*Copelatus teranishii* Kamiya, 1938

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1941年に大牟田市からの記録があるだけで、その後は県内から採集されていない。

分類・形態：セスジゲンゴロウ属の仲間は、いずれも上翅にはっきりとした条溝がある。雌での同定は、はなはだ困難な場合が多い。県内からは、本種を含め5種が記録されている。体長4.8～5.5mm。体は長卵形で扁平。背面は暗褐色～黒褐色で細かく点刻される。前胸背板は前縁に沿ってやや不規則な点刻列があり、後角付近には短い縦じわがある。上翅には6条の条溝があり、亜外縁溝は中央より第5条先端前に至る。基部にはさほど広くはない黄褐色帯を有する。間室は、雄では光沢があるが、雌では密な縮刻を有するため光沢がない。後頭、前胸背板両側、腹面、触角、口肢、脚などは黄褐色となる。

分布：(県内) 近年の記録なし

(県外) 本州(秋田, 山形, 福島, 岐阜, 大阪, 三重, 福井, 愛知, 兵庫), 九州(佐賀, 大分), 対馬。いずれの地でも、局所的で個体数は少ない。大分県中津市野衣の休耕田の水たまりで多数採集されていることから、県内でも生息している可能性は非常に大きいと考えられる。

生活史・生態・生息地：成虫の生活史や生態、幼虫については、ほとんどわかっていない。生息地は、今にも干上がりそうな畑の脇の排水用に掘ってある溝、林の中の水たまり、休耕田など、非常に不安定な浅い水域である。そのため、安定した生息地は非常に少なく、既知の産地に行っても水が干上がっていることも多い。

(松井)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

カンムリセスジゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Copelatus kammuriensis* Tamu & Tsukamoto, 1955

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1952年に久留米市笹山で3頭が、また1992年に朝倉町田中の筑後川の河川敷の湿った落ち葉の中から越冬中と思われる2頭が採集されただけである。

分類・形態: この属の種は互いに似ており、雌のみでの同定は困難な場合が多い。

体長4.6~5.6mm。体長は体幅の2倍。体は細長い逆長卵形で、扁平である。背面は赤褐色~暗褐色で細かく点刻され、前胸背板は前縁に沿って不規則な点刻列があり、後角付近には短い縦じわがある。上翅には6条溝があり、亜外縁溝をもつ。基部には幅広い明瞭な黄褐色帯を有する。間室は、細かい点刻をもち、雄では光沢があるが、雌では密な縦じわの

ため光沢がほとんどない個体も多い。腹面、触角、口肢、脚などは、黄褐色~暗赤褐色となる。

分布: (県内) 朝倉町

(県外) 本州 (岐阜, 滋賀, 大阪, 兵庫, 奈良, 大分), 九州 (佐賀, 熊本, 鹿児島), 京都の冠島, 香川の直島

生活史・生態・生息地: 成虫や幼虫の生活史や生態については、ほとんどわかっていない。生息地は、今にも干上がりそうな畑の脇の排水用に掘ってある溝、林の中の水たまりや溝、河川敷や荒地の水たまりなどのような、非常に不安定な浅い水域である。

(松井)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

コウベツブゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Laccophilus kobensis* Sharp, 1873

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1938年に「福岡」の、また1939年に「南筑後」の古い記録があるだけで、その後、60年以上県内から記録がない。

分類・形態: 体長3.4~3.8mm。体は逆卵形で、小盾板は認められない。背面は、全面に微細な網目状印刻を密にもち、わずかに光沢がある。頭部は横長で短く、淡黄褐色である。前胸背板はほとんど淡黄褐色で、前・後縁中央が暗色となる個体もある。

上翅は全体的には淡褐色~茶褐色を呈し、時に淡緑色を帯びる。基部は暗色で、その後方には、淡色の横帯がある。更にその後方には、6~7列の暗色の縦条をもつ。触角、口肢、脚は、黄褐色である。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州 (宮城~山口), 四国 (高知, 徳島), 九州 (大分, 熊本, 宮崎, 鹿児島), 上甌島, 種子島, 八重山諸島 (石垣島, 西表島)

(国外) 中国

生活史・生態・生息地: 一般的に、成虫は、春から秋にかけて採集される。冬季には、採集されないことから、成虫は、水から離れて落ち葉の下や土中で越冬していると考えられる。幼虫については、よくわかっていない。生息地は、池沼、休耕田、湿地などの止水域であるが、県内の産地は、文献に詳細な記述がないために現状の確認はできない。

(松井)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

キベリマメゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名：*Platambus fimbrianus* (Sharp, 1884)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内からの記録は少なく、1932年に「福岡」、1939年に「南筑後」から記録された。その後、50年近く経って、1987年に久留米市で灯火採集により1頭が採集されている。それ以降の記録はない。

分類・形態：体長約6.5～8.0mm。体は長楕円形で少し厚みがある。背面は黒～黒褐色で強い光沢をもつ。前胸背板は両側縁に幅広い淡黄色帯をもつ。上翅は肩部に淡黄色の横帯と側縁に沿った淡黄色縦帯をもつが、翅端には達しない。上翅の淡黄色の斑紋は個体変異が大きく、幅の広さは様々である。上翅には明瞭な3条の点刻列がある。腹面、触角、口肢、脚は赤褐色で、腹面の光沢は強い。

分布：（県内）久留米市

（県外）北海道、本州（宮城～山口）、四国（徳島、高知）、九州（長崎を除く各県）など。分布は極めて局所的であり、個体数も多くはない。鹿児島では、川内川上流の樋脇町の1例のみ。

（国外）中国、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：流水性で、成虫および幼虫の餌としては、カゲロウやトビケラの幼虫などが考えられるが、詳しい生態については、よくわかっていない。生息地は、河川中流の流れの緩やかになったよどみの石下・植物の間や岸辺の水際である。なお、近似種のモンキマメゲンゴロウは、本種よりもより上流の清冽な流域に生息している。

（松井）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

コガタノゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名：*Cybister tripunctatus orientalis* Gschwendtner, 1931

カテゴリー：絶滅危惧Ⅰ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：以前は県内各地に普通に生息しており、1921～1930年に福岡市、柳川市、篠栗町、1938年に若松区、1939年に「南筑後」、1948年に筑紫野市、1955年に田川市と久留米市高良山、1961年に北九州市陣原、1995年に能古島の記録がある。今回の調査でも志摩町芥屋のため池から採集された。

分類・形態：体長約24～29mm。体は長卵形で、前胸背板から上翅の側縁部は淡黄色に縁取られる。マルコガタノゲンゴロウよりもわずかに大きい程度で、背面はよく似ているが、腹面の色が異なる。

分布：（県内）能古島、志摩町

（県外）本州（山形～山口）、四国（高知）、九州、

沖縄、佐渡島、八丈島、福江島、小笠原

（国外）台湾、中国、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：成虫は、主に弱った魚や動物の鈍い水生昆虫などを捕らえ、強力な顎でかじり取って食べる。幼虫は動くものは何にでも反応し、大顎で捕らえ、消化液を送り込み、体外消化して吸い込む。成虫で越冬し、翌年の4～7月に水草の茎に穴を開け、1個ずつ産卵する。孵化した幼虫は約2カ月で成虫となる。通常2～3年は生きるようである。生息地は、主に平野部から山間部の水草の多い池沼、水田、休耕田や湿地などである。

（松井）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クロゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名：*Cybister brevis* Aube, 1931

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1938年に添田町英彦山で1雄が採集されている。その後、50年以上記録がなかったが、1994年に福岡市中央区舞鶴公園の1号濠で1頭が採集された。この2頭以外の記録はなく、かつての生息環境は、農薬散布・ほ場整備・池沼や湿地の埋立やコンクリート護岸などによって破壊されている。

分類・形態：体長約20～25mm。体は卵形で、背面は、緑色あるいは褐色を帯びた黒色で、腹面は、黒色～暗赤褐色。上翅には3条の点刻列があり、翅端前方には小さな黄褐色の斑紋をもつが、個体によっては、はっきりしない。前胸背板から上翅の側縁部は、淡黄色に縁取られない。

分布：(県内) 福岡市中央区

(県外) 本州（秋田～山口）、四国（徳島、高知）、

九州（長崎を除く各県）、対馬、上甌島、下甌島、種子島など

(国外) 中国、朝鮮半島

生活史・生態・生息地：主に平野部から山間部の水草の多い池沼、水田、休耕田や湿地などに生息し、成虫は弱った魚や動作の鈍い水生昆虫などを捕らえ、強力な顎でかじり取って食べる。成虫で水中越冬し、翌春に交尾した雌は、数日の内にオモダカやコウホネなどの水草の茎に穴を開け、産卵管を差し込み1個ずつ産卵する。孵化した幼虫は、老熟すると水中を出て土中に潜り蛹室を作ってその中で蛹化する。孵化後約2カ月で成虫になる。成虫は、通常2～3年は生きるようである。

(松井)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

シマゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名：*Hydaticus bowringi* Clark, 1864

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：以前は県内各地に普通に見られ、福岡市、添田町英彦山、筑紫野市二日市などの記録がある。1955年に田川市で採集されてからは、40年以上も記録はなかったが、1999年に彦山川小松堰で採れている。農薬散布・ほ場整備・池沼や湿地の埋立やコンクリート護岸などによって、かつての生息環境は、破壊されており、県内では自然の残った場所でわずかに生息していると思われる。

分類・形態：体長12.5～14mm。体は卵形で背面はよく隆起し、光沢がある。頭部は前半が淡黄褐色で後半は黒色。前胸背板は淡黄褐色で、前縁と後縁の中央が黒色。上翅は黒色で、基部直後の会合線付近に淡黄色の円紋を有し、中央と側縁近くに淡黄色の縦条を帯び後方でつながる。この淡黄色の円紋により

他種との区別は容易である。

分布：(県内) 彦山川

(県外) 北海道、本州（秋田～山口）、四国、九州（長崎を除く各県）、対馬、種子島、屋久島、トカラ列島の中之島および宝島

(国外) 台湾、中国、朝鮮半島など

生活史・生態・生息地：平野部から山間部にかけての水草の多い池沼、水田、休耕田や湿地などの比較的浅い水域に生息し、成虫は5～7月に水草の表面に産卵する。幼虫は2週間ほどで、3齢を経て上陸し、土の上に土繭を作って蛹化する。産地では夏には、灯火によく飛来する。冬季は水中からは得られないことから、落ち葉の下などで越冬しているものと思われる。成虫の寿命は1年ほどである。

(松井)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

コオナガミズスマシ

コウチュウ目 ミズスマシ科 Gyrinidae

学名：*Oreochilus punctipennis* Sharp, 1884

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では1936年に吉井町を流れる巨瀬川で1頭が採集されただけで、その後60年以上記録がない。近年のダム建設、河川のコンクリート護岸および家庭排水や工場排水による汚染などにより、生息環境は危機的状況にあり、県内では絶滅の可能性がある。

分類・形態：体長5.5～6.2mm。体は長楕円形で、強く膨隆する。背面は褐色を帯びた黒色で、淡黄色の微細毛を密にもつ。腹面は褐色～暗褐色。頭部の前半のしわ状部は、弱くて細かく、小点刻をやや密に装う。触角は短い。小盾板は小さいが、認められる。脚は黄褐色。水上と水中を同時に見られるように複眼が上下に2分されており、四つ目となる。上翅の先端は丸く湾曲し、外縁もほぼ丸まる。雌では、翅端線が、内方でもやや斜めで会合線が少し後方に張り出す。前脚は水面に落ちた餌の昆虫などを捕らえやすいように長く発達し、中・後脚は短く、泳ぎやすいように扁平で、オールのようなになる。雄の前節は

かなり広がる。第8腹板は細長く、上翅からはみ出す。第7～8腹板中央に細毛からなる条線がある。エゾコオナガミズスマシに似ているが、頭部前半のしわがより細かく、弱い小点刻を装い、上翅の点刻が、より密であることで区別できる。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州（新潟～岡山）、四国（愛媛）、九州（佐賀、熊本、鹿児島）。産地は局所的で、いずれの場所でも少ない。

生活史・生態・生息地：平地～山地の清流で緩やかな流れのある水域に生息し、成虫は水面に浮いた動物の死体や小さな昆虫類を捕食する。摂食の方法は、ゲンゴロウ類と同じように強力な顎でかじり取って食べる。幼虫も成虫同様に動物質を食べる。池沼、小川などの水面を巡回するが驚くと水中に潜入する。

（松井）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ツマキレオナガミズスマシ

コウチュウ目 ミズスマシ科 Gyrinidae

学名：*Oreochilus agilis* Sharp, 1884

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、1936年に吉井町を流れる巨瀬川より2頭が、また、1951年に宝満川より2頭が採集されただけで、その後の記録はない。

分類・形態：体長6.0～7.2mm。体は長楕円形で、強く膨隆する。背面は褐色を帯びた黒色であり、一様に小点刻と短毛を装い、前胸背板では点刻が浅くてやや不明瞭となる。頭部は滑沢。触角は短い。小盾板は小さいが、認められる。脚は、黄褐色。水上と水中を同時に見られるように複眼が上下に2分されており、四つ目となる。上翅は、外縁に沿って黄褐色を呈し、翅端会合部は、翅端裁断部より内側とな

る。前脚は水面に落ちた餌の昆虫などを捕らえやすいように長く発達し、中・後脚は短く、泳ぎやすいように扁平で、オールのようなになる。雄の前附節はかなり広がる。第8腹板は細長く、上翅からはみ出す。第7～8腹板中央に細毛からなる条線がある。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州（栃木、東京、神奈川、兵庫、山口）、四国（高知）、九州（熊本、宮崎）

生活史・生態・生息地：山地にある清流で緩やかな流れのある水域に生息し、生態はコオナガミズスマシと同様である。

（松井）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クロボシヒラタシデムシ

コウチュウ目 シデムシ科 Silphidae

学名：*Oiceoptoma nigropunctatum* (Lewis, 1888)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、1934～1935年と1951年に英彦山、1938年に犬ヶ岳から採集され、1999年に矢部村釈迦岳の尾根でも採集されている。本種は、山地帯、それも深い原生林のある場所で点々と採集されている。九州では極めてまれで、九重山系や霧島山から記録されているだけである。福岡県においては、夏緑樹林帯などの原生林がほとんどなくなり、その生息が危ぶまれる。

分類・形態：成虫は黒色で光沢がなく平たい。頭の両眼間には4つのくぼみと横隆起があり、前胸背板は赤褐色で、背板中央部に4つの光沢のある黒点が四角に位置する。上翅には各3隆条がある。四赤褐色

の前胸背板とその中央の4黒点は安定していて、近似種からの区別は容易である。

分布：（県内）釈迦岳

（県外）本州および九州の山地帯に局地的に産する。九州では、大分や宮崎からの記録がある。いずれも九州中央山地である。

生活史・生態・生息地：成虫は、動物の死体、腐肉、糞に集まり、蠅の幼虫（ウジ）などを捕らえて食べる。幼虫も腐った動物質に集まることが知られており、またキイロスッポンタケの幼菌などから多数採集されたことがある。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ツノコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名：*Liatongus phanaeoides* (Westwood, 1840)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、英彦山と熊渡山からの古い記録だけで、1961年以降の記録はない。久住や阿蘇高原では放牧地の牛糞に生息して個体数も多いが、県内では放牧地の減少で採集できなくなっている。大分県では原生林内でタヌキなどの小動物の糞などからも採集されているので、県内でも山地で再発見の可能性はある。

分類・形態：成虫は黒色ないし黒褐色で光沢がない。頭部は六角形で、雄では中央に長く湾曲した1本の長い角があるが、小型個体ではこの角は長い三角形となる。前胸背板は、雄では両側に、雌では中央両側に隆起条がある。ほかの食糞性コガネムシに

比べ、上翅や前胸は著しく平圧される。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬など

（国外）朝鮮半島、中国、台湾、インドシナ半島からインド、ヒマラヤ

生活史・生態・生息地：成虫は山間の放牧地や山地の獣糞に多く集まる。特に日向の馬糞を好み、少し乾燥したものにも集まる。雌は獣糞を土中にあけたトンネルの中に詰め込み産卵する。幼虫は、この獣糞を食べて育つ。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

セマルケシマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名: *Psammodius convexus* Waterhouse, 1875

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、1954年の田川市東町以来採集されていなかったが、1999年に玄海町釣川河口付近の砂浜で、ケカモノハシの根際を掘って採集され、また、福岡市の海の中道の玄界灘側海岸からも採集されている。発見地では、護岸工事の進行、砂丘の侵食、四輪駆動車の砂浜への乗り入れなどによる生息環境の悪化も見られる。
分類・形態: 成虫は光沢のある褐色。体長2~3mm。頭には顆粒があり、後方中央に2条の溝がある。前胸背板には5条の横隆起線があり、後方の2条は縦溝で中断される。上翅には条溝があるが細く弱い点刻

があり、間室は幅広くわずかに高まる。

分布: (県内) 玄海町, 福岡市東区

(県外) 北海道~九州に分布。福岡近辺では熊本県天草の記録がある。

生活史・生態・生息地: 本種が生息する場所は、第1級の自然海岸の砂浜であり、砂丘草原中の植物の根際である。しかも、ある程度の面積がある場所に生息するようである。成虫・幼虫ともに植物の根を食害しているものと思われる。灯火にも飛来するという。

(城戸)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ニセマグソコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名: *Aegialia nitida* Waterhouse, 1875

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1936年に北九州市戸畑で採集されたが、そこには現在自然海岸は全くないため本種の生息は考えられない。その後、1973年に玄海町神湊釣川河口に生える海浜植物の根際から多数採集されており、また1999年に津屋崎町恋の浦砂浜でカラヨモギの根際と福岡市海の中道の玄界灘側の海岸から採集されている。本種が生息する場所は、護岸工事の進行、砂丘の侵食、四輪駆動車の砂浜への乗り入れなどによって生息環境が悪化している。

分類・形態: 成虫は黒色で光沢があり、頭胸前縁、上翅会合部、脚は赤褐色。背面は強く隆起する。頭

部前半には弱い顆粒がある。眼は上面に出ない。前胸背板は滑らかで、上翅には明瞭な条溝がある。体の腹面には、黄色の長毛を生ずる。

分布: (県内) 津屋崎町, 福岡市東区

(県外) 北海道, 本州, 九州に分布。福岡近辺では佐賀の記録があり、また佐賀県呼子でも採れている。

生活史・生態・生息地: 本種は海浜植物の根際が生息し、幼虫はこれら植物の根を食害しているものと思われるが、腐った植物に見られたという記録もある。

(城戸)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

オオチャイロハナムグリ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名: *Osmoderma opicum* Lewis, 1887

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: 本種が最もよく採集されているのは英彦山で、多くの記録があり、比較的最近でも採集されている。近くの障子岳でも採集されている。このほか、熊渡山、古処山、宝満山など標高の高い山からの記録が多く、若杉山山麓で採集したという記録もある。いずれの地においても個体数は少なく、ほかの県においても同様である。本種が生息するのは高山の良好な自然林であり、成虫は樹幹の空洞に潜むといわれているので、空洞のあるような高地の自然林の減少とともに、本種の生息も危ぶまれる。

分類・形態: 成虫は体長22~32mmと大きく、黒褐色で光沢がある。前胸背板には、中央に2縦隆起があ

り、雄においては特に明瞭。上翅は前胸背板より著しく幅広い。尾節板は、雄では中高、雌ではとがる。成虫は、捕らえたときじゃ香のような香気を発する。

分布: (県内) 英彦山、宝満山

(県外) 本州~九州、屋久島に分布。福岡近辺では大分や熊本などの高地からよく記録されている。比較的低い場所として長崎県平戸島の記録もある。

生活史・生態・生息地: 成虫は、7~8月頃山地の倒木や朽ち木の空洞内やその入口などで発見できる。幼虫はその中の腐植土中にすみ、粘液で土塊をつくらせて蛹化する。英彦山ではクヌギの樹液にきたという記録がある。

(城戸)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

オオトラフコガネ

コウチュウ目 コガネムシ科 Scarabaeidae

学名: *Paratrichius doenitzi* (Harold, 1879)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、英彦山、障子岳、鷹ノ巣山、古処山、屏山から記録されており、1999年に星野村石割岳で1頭が採集されている。本種が生息するのは、高山の良好な自然林の残された地域である。県内ではいずれの地でもあまり多くはなく、自然林の減少とともに本種の生息も危ぶまれる。

分類・形態: 顕著な斑紋をもつ種で、雄の触角片状部は長く、柄部の1.5倍以上ある。雄は前胸背板や上翅に黄色の美しい斑紋をもつが、変化が多くほとんど黒化して雌に似るものまである。近似種との外部形態の差は小さいが、雄の交尾器、雌交尾器内の

骨片の形態が大きく異なる。

分布: (県内) 星野村、古処山

(県外) 本州~九州に分布するが、紀伊半島のものと九州中・南部のものは別種とされる。福岡近辺では阿蘇以北の高山に分布。

生活史・生態・生息地: 成虫は6~8月頃山地のノリウツギ、ガクウツギ、イワガラミなどの花に集まる。雌は朽ち木で発見されることも多く、朽ち木に産卵。幼虫は朽ち木の中を食べ進み、5~6月頃蛹化して成虫になる。

(城戸)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科 Lucanidae

学名：*Dorcus hopei* (E.Saunders, 1854)

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：日本産クワガタムシ科の最大種であり、県内では福岡市平尾、久留米市、英彦山、広川町、足立山、篠栗町、若杉山、筑紫野市天拝山、吉井町、小都市、高良山、柳川市、城島町、三潞町、大木町、宗像市などから記録されている。筑後平野以外は古い記録が多い。主な生息地である筑後平野一帯では、近年クヌギなどの老木が伐採によって見られなくなり、更にマニアによる幼虫などの採集も影響して本種は激減している。

分類・形態：雄の大顎の形態は体長により変化する。頭盾は著しく横長。前胸背板は幅広く、側縁の中央より斜め前方に丸くえぐれるが、小型のものではこれを欠く。上翅は微細点刻があるが、小型のものでは強い点刻列となる。雌は強い光沢と上翅に点

刻列を具える。

分布：（県内）筑後平野一帯

（県外）北海道～九州、対馬。福岡近辺では佐賀平野一帯に広く分布。

（国外）朝鮮半島、中国

生活史・生態・生息地：平地性の種で昼はクヌギなどの樹洞に潜み、夜行性で樹液に集まる。幼虫は倒木などの中を食べ進み、その食害樹種はクヌギ、エノキ、アラカシ、ナンキンハゼ、ヤナギなど広範囲である。成虫で越冬し、数年生きた記録もある。筑後平野ではハゼの古木の害虫としての記録もあり、また同好者による飼育も盛んに行われている。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオマドボタル

コウチュウ目 ホタル科 Lampyridae

学名：*Lychnuris discicollis* (Kiesenwetter, 1874)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：高良山、英彦山、障子岳、北九州市畑、田川市、城山、笠置山、古処山、篠栗町、香春岳、福岡市南公園、風師山、離島の大島や地島の記録があり、福智山、犬鳴山、清水山、大牟田市三池山、星野村石割岳で採集されているが、生息地である自然林の減少とともに本種も減少している。

分類・形態：頭部は前胸に覆われる。前胸背板は黒く、中央部分に淡赤色の斑紋をもち、前縁近くには2個の明らかな窓状部がある。各上翅には、微弱な縦の3隆起条をもつ。体面下は黒いが、前胸下は淡赤色。腹部末節に黄紋が1対ある。触角はやや太く扁平。

分布：（県内）福智山、犬鳴山、清水山、三池山、星野村石割岳

（県外）本州（近畿地方以西）～九州に分布。福岡近辺では、大分や熊本にも分布しているが局地的。

生活史・生態・生息地：低山から高山にかけての良好な自然林の林縁に見られる。草の上に静止していたり低く飛翔しているものを見ることが多い。詳しい生態は未解明であるが、幼虫は暗い湿った場所に生息し、餌となる陸生貝類を捕食していると思われる。雌は恐らく幼虫型で上翅は小片状、後翅は退化していると考えられている。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオオバボタル

コウチュウ目 ホタル科 Lampyridae

学名：*Lucidina accensa* (Gorham, 1883)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、障子岳、鷹ノ巣山、北九州市河内、英彦山、竜王山、笠置山の記録があり、福智山、矢部村釈迦岳、脊振山、星野村石割岳で採集されている。生息地である自然林の減少、林道建設や伐採などによる森林の乾燥化などに伴い、本種の個体数は激減している。

分類・形態：体長12mm内外で、幅が広く、前胸背板は半円形に近いが、前部中央が突出して平たい五角形を呈する。前、側縁は強く上反する。雄の前、中脚の爪の一方に顕著な鋭い突起がある。体面下は黒いが、前胸下は淡赤色。腹部後方の節は淡赤色。触角は扁平で幅広い。

分布：（県内）福智山、釈迦岳、脊振山、星野村石

割岳

（県外）本州～九州に広く分布。福岡近辺では大分や熊本にも分布しているが、いずれも山地帯である。比較的低い場所として長崎県平戸島の記録もある。

生活史・生態・生息地：山地性の種で、良好な自然林の中や林道周辺などや、薄暗い林内でも見られ、林道の草の上に静止していたり低く飛翔していることが多い。平地や低山地では得られていない。詳しい生態は未解明であるが、幼虫は湿った朽ち木の下などに生息し、肉食性で小動物を捕食すると思われる。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

エゾベニヒラタムシ

コウチュウ目 ヒラタムシ科 Cucujidae

学名：*Cucujus opacus* (Lewis, 1888)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では1962年に障子岳から記録され、1963年にも障子岳から多くの個体が記録された。1996年には矢部村釈迦岳の尾根でも採集されている。本種は、山地帯、それも深い原生林のある場所に点々と産し、九州では極めてまれで、九重山系や九州中央山地から記録されているだけである。県内においても、もともと生息数が少ない上、夏緑樹林帯などの原生林がほとんどなくなり、その生息が危ぶまれる。

分類・形態：体は著しく扁平。黒色で上翅だけが光沢のない赤色。頭部複眼後方は強くこぶ状に突出する。大顎は強大。触角は細長い。近似のベニヒラタムシとは、触角第3節が第2節の2倍よりも短く、前

胸背板は後方に狭まり、前角付近で最大幅、上翅が蠟状物でおおわれて光沢がない、などの点で区別できる。

分布：（県内）釈迦岳

（県外）北海道～九州に分布。福岡近辺では、大分県九重山系や熊本の九州中央山地に分布するが、産地は局地的で個体数も非常に少ない。

生活史・生態・生息地：夏緑樹林帯のある高山に生息するが少ない。成虫・幼虫ともに枯れ木（熊本県白髪岳ではモミなどの針葉樹でよく見かける）の樹皮下に生息する。幼虫も扁平で、樹皮下にすむ昆虫類の幼虫を捕食する。成虫で越冬する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ルリヒラタムシ

コウチュウ目 ヒラタムシ科 Cucujidae

学名：*Cucujus mniszehi* Grouvelle, 1874
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、1963年に障子岳で3頭採集されただけで、その後の記録はない。本種は、山地帯、それも深い原生林のある場所に点々と産し、九州では極めてまれである。障子岳一帯の原生林はほとんど伐採されて人工林となったため、この地からの再発見は難しい。もともと生息数が少ない種であるうえ、生息環境である山地の自然林が減少しており、本種の生息が危ぶまれる。**分類・形態：**体は著しく扁平。黒色で上翅だけが青藍色でほとんど光沢がない。頭は前頭部に浅い1対のくぼみ、後頭部に深い1横溝を具える。複眼後方は強くこぶ状に突出する。触角は細長く、第3節は長く、第2節の2倍以上。大顎は強大。前胸背板は前半部においてほぼ平行で後半部は後方に狭まる。上

翅は微細点刻を装いさめ肌状。体長25mmに達する大型種で、近似種がないため同定は容易である。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）北海道～九州に分布。福岡近辺では、御前岳（八女郡）の大分側の記録があるほか、大分県九重山系や熊本の九州中央山地に分布。産地は局地的で個体数も非常に少ない。

生活史・生態・生息地：夏緑樹林帯のある高山に生息するが少なく。成虫・幼虫ともに枯れ木の樹皮下に生息する。大分県黒岳では台風で折れてささくれたサワグルミの木口から多数の成虫が発見されたことがある。幼虫も扁平で、樹皮下にすむ昆虫類の幼虫を捕食する。成虫で越冬する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオキノコムシ

コウチュウ目 オオキノコムシ科 Erotylidae

学名：*Encaustes praenobilis* Lewis, 1883
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、英彦山、障子岳、鷹ノ巣山、矢部村釈迦岳、古処山から記録され、求菩提山、屏山でも採集されている。本種が生息するのは、高山の良好な自然林の残された地域であるため、自然林の減少や乾燥化によって、その生息が危ぶまれる。

分類・形態：日本産オオキノコムシ科では最大の種で、体長は35mm前後。黒色で光沢があり、前胸背板、上翅の肩部と翅端に赤い斑紋がある。前胸背板は、前基節の間で広く三角形に隆起する。雄は前脛節内側の基方に歯突起があり、それより先端にかけて鋸状を呈する。日本に近似種はなく同定は容易である。

分布：（県内）英彦山地、釈迦岳山地、古処山地

（県外）北海道～九州に分布。福岡近辺では、大分県九重山系や熊本の九州中央山地などの記録があるが、どの地でもまれである。なお、本種は本州を北に向かうほど普通種となる。

生活史・生態・生息地：成虫は6月頃から山地のコフキサルノコシカケなどの大型の多孔菌のほか、アシグロタケなどにも集まる。幼虫はこれらの菌が生えた朽ち木の中を食べ進む。幼虫で越冬し、翌年の初夏ごろ新成虫となる。菌が乾燥すると、朽ち木の樹皮下に見られることも多い。灯火にも飛来する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ウンモンテントウ

コウチュウ目 テントウムシ科 Coccinellidae

学名: *Anatis halonis* Lewis, 1896

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、英彦山、障子岳、鷹ノ巣山、矢部村釈迦岳の記録だけである。本種が生息するのは、高山の良好な自然林の残された地域であり、自然林の減少とともに本種の生息も危ぶまれる。

分類・形態: 成虫は黄褐色で、頭の大部分、前胸背板の斑紋は黒色。体下は黄白色の中胸側板を除き黒色。各上翅紋は9~10個で、黒色で黄色環をもつ。この黒色部は個体により大きさが大小し、時に消失する。翅端紋は常に黄色。脚は黄褐色。この科としては大型で体長8mm前後にも達する上、特異な色彩と斑紋から他種から容易に区別できる。

分布: (県内) 英彦山地、釈迦岳

(県外) 北海道~九州。福岡近辺では大分、熊本、長崎からの記録があるが局地的である。いずれも九州中央山地や多良岳などの高地である。

(国外) 千島列島

生活史・生態・生息地: 成虫は、6~8月頃、山地の樹葉上に見られる。矢部村釈迦岳では7月中旬、山頂近くの岩場に生えたタンナサワフタギの花から多数のナミテントウに混じって得られた。また、灯火にも飛来する。

(城戸)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ジュウサンホシテントウ

コウチュウ目 テントウムシ科 Coccinellidae

学名: *Hippodamia tredecimpunctata timberlakei* Capra, 1931

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、久留米市、行橋市、北九州市若松区有毛、福岡市能古島、同東区多の津からだけ記録されている。河口付近のヨシ群落などで採集されることが多く、河川の改修などによってヨシ群落などが減少するに伴い、本種の生息が危ぶまれる。

分類・形態: 触角は黄色。頭は、三角形の前頭部は黄色でその後ろは黒色。前胸背板は黄赤色だが、中央はほぼ四角形に黒色、その外側に1対の黒色小黒点をもつ。上翅は黄赤色で、13個の黒色斑紋をもつ。小盾板は黒色。体下はほとんど黒色。脚は腿節と爪は黒色でほかは黄赤色。この科にしては珍しく細長い体形をもつことや上翅の斑紋の数などで他種から

容易に区別できる。

分布: (県内) 久留米市、行橋市、北九州市若松区有毛、福岡市能古島、同東区多の津

(県外) 北海道~九州

(国外) シベリア、朝鮮半島、中国、モンゴル、中央アジア、ヨーロッパ、北アメリカ大陸など

生活史・生態・生息地: 成虫は、5月頃から出現する。海岸、河口、湖や池の岸など、ヨシ群落に局地的に発見されている。モモコフキアブラムシやイネマダラヨコバイを捕食することが知られている。灯火にも集まる。

(城戸)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クシヒゲビロウドムシ

コウチュウ目 アカハネムシ科 Pyrochroidae

学名：*Pseudodendroides ocularis* (Lewis, 1887)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1935年に久留米，1958年に英彦山，1960～1961年に障子岳から採集されただけである。本種が生息するのは，山地の良好な自然林の残された地域で，自然林の減少とともに本種の生息は非常に危ぶまれる。

分類・形態：黒色ないし黒褐色。頭は雄においては平坦で，眼は大きく，両眼はほとんど接する。額は眼の前方で高まる。雌では触角基点と両眼間は横溝上にくぼみ，その前方は高まる。前胸背板の肩部は強く丸まり，前半中央は縦にくぼみ，後方で浅いくぼみとなる。両側には1対のくぼみがある。上翅は

赤褐色で，紅赤色のビロウド状の短毛を密生する。近似のオオクシヒゲビロウドムシとは，小型であること，雄において両眼がほとんど接すること，などで区別できる。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州，九州に分布。少ない種で，九州では福岡以外からの記録はない。

生活史・生態・生息地：成虫は5～6月頃，山地の朽ち木や立ち枯れに見られる。成虫は朽ち木に産卵し，幼虫は朽ち木の樹皮下にすみ，そこで蛹化する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオクシヒゲビロウドムシ

コウチュウ目 アカハネムシ科 Pyrochroidae

学名：*Pseudodendroides nipponensis* (Lewis, 1887)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1928年に久留米，1939年と1970年に英彦山，1963年に障子岳から記録され，1999年に星野村石割岳でブラックライトに飛来した1頭が採集されている。本種が生息するのは，高山の良好な自然林の残された地域で，自然林の減少とともに本種の生息が危ぶまれる。

分類・形態：黒色ないし黒褐色。眼は大きく，触角基点と両眼前縁の間は広くくぼむ。雄の両眼間は触角第2節の長さとはほぼ同長，雌ではその2倍。前胸背板は長さより少し幅広で肩部は強く丸まり，黄白色毛を装う。前半中央は縦にくぼみ，基縁中央は三角

形にくぼむ。両側には1対のくぼみがある。上翅は暗赤褐色で，紅赤色のビロウド状の短毛を密生する。

分布：（県内）星野村石割岳

（県外）本州～九州に分布。福岡近辺では，九重山地や九州中央山地などに分布。

生活史・生態・生息地：成虫は7～8月頃，山地のブナなどの大木の朽ち木や立ち枯れやその付近の樹木の葉上に見られることも多い。雌は朽ち木に産卵し，幼虫は朽ち木の樹皮下にすみ，5～6月頃樹皮下で蛹化して成虫になる。灯火にもよく飛来する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ウスイロアカハネムシ

コウチュウ目 アカハネムシ科 Pyrochroidae

学名：*Pseudopyrochroa peculiaris* (Lewis, 1887)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1938年と1998年に英彦山，1959年に障子岳，1970年に鷹ノ巣山，1979年に福智山から記録されて，1980年に古処山，1995年に矢部村釈迦岳で採れている。本種は，山地の良好な自然林に生息するので，自然林の減少とともに本種の生息が危ぶまれる。

分類・形態：黒色。頭は雄においては両眼間に深い2凹陥があり，雌では横に浅くくぼむ。触角は短毛を密生し，雄雌ともに櫛状。雄の触角第2節は強く三角形に広がり，第3節の半分よりもやや長い。前胸背板は長さよりはるかに幅広く，暗灰褐色の短毛を密生し，中央部は正中溝と合して広く浅くくぼ

む。上翅は，暗赤色で赤色の短毛を密生する。同属の種とは雄触角の形状で区別できる。

分布：（県内）古処山，釈迦岳

（県外）北海道～九州に分布。福岡近辺では九重山地や九州中央山地などに分布しているが，産地は局地的である。

生活史・生態・生息地：成虫は4～7月頃，山地の朽ち木や立ち枯れに見られる。早春には朽ち木樹皮下で成虫・幼虫ともに採集される。成虫は朽ち木に産卵し，幼虫は朽ち木の樹皮下にすみ，ほかの昆虫類を捕食しながら成長し，そこで蛹化する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クロアカハネムシ

コウチュウ目 アカハネムシ科 Pyrochroidae

学名：*Pseudopyrochroa episcopalis* (Lewis, 1895)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1935年に英彦山で採集された標本による記録だけで，その後は採集されていない。本種の生息地である山地の良好な自然林が減少しているため，本種の生息は危ぶまれる。

分類・形態：黒色で，頭上面と口器は黄褐色。頭は，雄では頭頂前方が前方に突出する。雌では両眼間に横のくぼみがあり両側で深く，その後は中央で凸隆する。触角は黒色細毛を密生し，雄の第1触角節は太く，第3節は第1節と同長で分枝は細長い三角形で節より短い。第2節は小さく，幅よりもわずかに長い。第4節より先の分枝は細長い。前胸背板は長さよりはるかに幅広く，白色短毛を装い各凹陥は浅

い。上翅は暗赤色で，紅赤色の短毛を密生する。上翅会合部と外縁部は黒色。同属の種とは，雄の触角や頭部の形状で区別できる。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）四国，九州に分布。福岡近辺では九重山地や九州中央山地などに分布しているが，産地は局地的である。九重山系黒岳には少なくない。

生活史・生態・生息地：成虫は6～7月頃，森林の中にある朽ち木や立ち枯れに見られる。成虫は朽ち木に産卵し，幼虫は朽ち木の樹皮下にすみ，ほかの昆虫類を捕食しながら成長し，そこで蛹化する。

（城戸）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

ヒラヤマコブハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Enoploderes bicolor* Ohbayashi, 1941
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、1938年に福岡市曲淵、1956年に福岡市野河内、1961年に犬ヶ岳、1975年に九千部山の記録があるだけで、県内では20年以上採集されていない。生息地である自然林が減少しているので、本種の生息は危ぶまれる。
分類・形態：体長9～16mm。側頭部はエラ張り状に発達する。前胸背板は黒褐色で背面は二こぶ状に盛り上がり、側面は中央付近で外側に突き出す。上翅は光沢のない赤色で、大きくややまばらに点刻される。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州～九州に分布。九州からはほかに、大

分県九重黒岳（大船林道）から1頭の記録があるのみ。かつては全国的に非常にまれであったが、生活史が解明されて以降、本州と四国の各地では多産地が知られるようになった。

生活史・生態・生息地：成虫は早春に出現し、平地～山地のアカメガシワ、コハウチワカエデなどの生木樹幹の空洞内で一生のほとんどを過ごす。ごくまれに、飛翔中や訪花中の個体が採集される。空洞内の芯腐れに産卵し、幼虫は中齢初期より樹木の生きた部分に食入する。平地では4年、山地では5～6年で一世代を完了する。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

フタコブルリハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Stenocorus caeruleipennis* (Bates, 1873)
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1931年に福岡市平尾で採集されて以来、英彦山地、皿倉山、足立山、犬鳴山、雷山、宮田町、福岡市野河内と、個体数は少ないものの平地から山地まで広く記録されていたが、障子岳～深倉峡で1962年に採集されて以降、40年近く採集されていない。生息場所である良好な環境の自然林が減少したことで、本種が危機的な状況になっている。

分類・形態：体長18.5～24mm。色彩変異が大きいですが、通常、前胸背板は前、後縁と側方が黄色でほかは黒色、上翅は瑠璃～青緑色、触角と脚の大部分は黒色。前胸背板には2対の大きな突起をもつ。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）北海道～九州。九州では全県から記録があるが、一般に少ない。大分県九重黒岳では例外的に多く、クリ花上などで多数が採集される。また、東北日本では普通に見られる。

（国外）サハリン

生活史・生態・生息地：成虫は晩春～盛夏にかけて出現し、ミズキ、ゴトウヅル、シシウド、クリ、リョウブ、ノリウツギなどの花を訪れるほか、発酵したバナナにも誘引されるという。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

スネケブカヒロコバナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Merionoeda hirsuta* (Mitono & Nishimura, 1936)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1934年に福岡市百道で採集された1頭を基に、新属 *Hakata* として新種記載されたが、その後福岡市周辺からは採集されていない。福岡市には当時、対馬から木炭用の薪が大量に持ち込まれており、ネムノキ材中に食入した幼虫が、移入されたものと思われる。県内では1970年まで英彦山地からのみ採集されていたが、その後は採れていない。1960年代は自然林を伐採して造林が進み、本種が産卵するネムノキの枯木が多かったと思われるが、スギとヒノキの成林後は本種が姿を消している。

分類・形態：体長10～14mm。前胸背板は雄が黒色、雌は赤色。上翅は強い光沢があり、全体黒色から、

会合部付近が広く暗赤色まで変異がある。触角は5節以降が鋸歯状。後腿節は膨らみ、暗色の長毛が、また後脛節には金色の長毛が密に生える。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州（山梨以西）～九州、隠岐（島後）、対馬。対馬では多産し、近年もリョウブ花上で多数が採集されている。

（国外）台湾

生活史・生態・生息地：成虫は7～8月に出現し、ノリウツギ、リョウブ、カラスザンショウ、アワモリシヨウマなどの花に集まり、ネムノキの立ち枯れや倒木、薪に産卵する。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

クスベニカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Pyrestes nipponicus* Hayashi, 1987

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：かつてはクスノキの害虫で、田川市、香春町、金田町、英彦山地、福智山、小倉、宮田町、飯塚市、足立山、平尾台、城山、若杉山、福岡市、高良山、大牟田市、星野村、沖ノ島、能古島と、平地から山地まで各地から記録されている。しかし1970～80年代にかけて減少が始まり、1987年の飯塚市笠置山を最後に、県内では10年以上採集されていない。食樹であるクスノキは以前同様に分布していることから、減少の原因は不明である。

分類・形態：体長14.5～19mm。通常、頭～胸部が黒～暗赤色、上翅は赤色。前胸背板は粗い横じわがあ

り、黒い長毛が一面に生える。上翅は粗く点刻される。触角第1～4節は長毛で覆われ、5～10節は鋸歯状。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）北海道（南部）～九州、佐渡、隠岐、淡路島、対馬、屋久島などに分布。対馬と長崎県東彼杵町では最近も多数採集されている。

生活史・生態・生息地：成虫は晩春～盛夏に出現し、アカメガシワ、リョウブ、ノリウツギなどの花に集まる。幼虫はクスノキ、シロダモ、タブノキなど、クス科樹木の細枝内部を食べる。

（藤本）

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ミドリカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名: *Chloridolum viride* (Thomson, 1864)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: かつては各地に多く、英彦山地、香春町、福智山、宝満山、若杉山、犬鳴山、笠置山、城山、宮田町、福岡市、久山町、熊渡山と、平地から山地まで広い範囲で、多数が採集・記録されていた。しかし、1980年代以降は激減し、1982年と1998年の城山、1988年の福岡市油山市民の森の記録が最後である。これには幼虫の食樹として利用されていたクヌギ、コナラ、クリなどの薪炭材やシイタケほだ木の減少が影響していると思われるが、これだけでは説明できないほどに減少の度合いは顕著である。

分類・形態: 体長12~19.5mm。背面は金属光沢のある緑色。前胸背板には横じわを生じ、上翅は粗く点

刻される。脚は細長い。

分布: (県内) 城山、油山

(県外) 北海道~九州、利尻島、礼文島、隠岐、淡路島、平戸島、対馬、壱岐、屋久島など

(国外) サハリン、朝鮮半島、中国

生活史・生態・生息地: 成虫は春~初夏に出現して、シイ、マルバウツギ、コゴメウツギ、クリなどの花に集まり、また各種広葉樹の伐採木上に集まって産卵する。幼虫は各種広葉樹の枯れ枝内部を食べ、対馬では今でもシイタケほだ木の害虫である。

(藤本)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

トラフカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名: *Xylotrechus chinensis* (Chevrolat, 1852)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: クワの害虫として有名で、星野村、笠置山、香春町、犬鳴山、福岡市平尾、西公園、足立山、高良山、大牟田市、九大農学部構内、甘木市などから記録がある。1970~80年代からのクワ畑の減少に伴い本種の採集記録も減少し、1994~96年に福岡市宮松にある九大農学部のクワ畑で確認されたのが最後である。養蚕業の衰退によるクワの減少で、本種が激減している。

分類・形態: 体長16~23mm。前胸背板中央部には、黒いふちどりの赤帯がある。上翅は黄色の地に黒の斜帯のしま模様があり、野外ではこの色彩と成虫の動作でスズメバチ類に擬態していると考えられてい

る。

分布: (県内) 福岡市東区など

(県外) 北海道~九州、佐渡、伊豆諸島、淡路島、対馬、壱岐、種子島、奄美大島、徳之島、沖縄本島。九州では、熊本県上村白髪岳のクワ畑で近年でも採集されている。

(国外) 台湾、朝鮮半島、中国東北部、ロシア極東
生活史・生態・生息地: 成虫は初夏~初秋にかけ出現し、特に夕方、クワの葉上に静止していることが多い。幼虫はクワの樹皮下から材部に食い入り、幼虫で越冬、約1年で成虫になる。

(藤本)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

ヒメビロウドカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名: *Acalolepta degener* (Bates, 1873)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、英彦山スキー場付近、古処山、平尾台でごく少数が採集されたが、1977年にオトコヨモギに集まる習性が判明して以降、風師山や平尾台、英彦山などで多数が採集された。平尾台では現在でも採集されているが、ほかの場所からは1990年代以降の記録がない。本種が生息するオトコヨモギ群落の減少が、本種の生存に影響している。

分類・形態: 体長8.5~12mm。前胸背板側面には弱い突起があるが、ほとんど突出しない。上翅は短く、不明瞭な白斑が出現する。上翅端は、両端を合わせた状態で丸い。触角第4~10の各節は、第3節より明

らかに短い。

分布: (県内) 平尾台

(県外) 本州 (新潟、関東以西) ~九州、対馬。石垣島には近縁の別種イシガキヒメビロウドカミキリが分布。

(国外) 台湾、朝鮮半島、中国

生活史・生態・生息地: 成虫は夏季に出現してオトコヨモギに好んで集まり、その枯れ葉内に潜んでいるものや、頭を下にして茎上に静止する個体が採集される。灯火に集まった例もある。

(藤本)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

アサカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名: *Thyestilla gebleri* (Faldermann, 1835)

カテゴリー: 準絶滅危惧 (環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由: アサの害虫として有名で、戦前はアサ畑で普通に見られた。県内でも、久山町や福岡市の記録がある。戦後、麻薬取締法によってアサの栽培が禁止されて本種も日本全国で激減した。草原に生えるアザミ類を食草にする個体群が局部的に残されたが、その後の環境悪化で絶滅した産地も多い。県内では、平尾台で1984年以降も採集されている。全国的にも貴重な産地なので、生息環境の保全が望まれる。

分類・形態: 体長10~15mm。体は黒色、しばしば黄灰色の微毛に覆われる。前胸背板正中部と両側、上翅側面上縁辺と会合部に白条が走る。触角は白黒のまだら模様。

分布: (県内) 平尾台

(県外) 本州 (新潟、福島以西) ~九州、隠岐 (島後)。九州では、大分県湯布院町塚原の草原で、近年も採集されている。

(国外) 極東地域大陸、朝鮮半島

生活史・生態・生息地: 成虫は5~8月に出現し、アザミ類の新芽をかじる。幼虫はアザミ類の生茎の皮下を食べた後、髓に食い入って根際で越冬、翌年羽化脱出する。また朝鮮半島では、帰化植物のオオマトヨイグサから成虫が多数得られるという。

(藤本)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

オオカマキリモドキ

アミメカゲロウ目 カマキリモドキ科 Mantispidae

学名: *Climaciella magna* (Miyake, 1910)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由:九州大学彦山生物学実験所に設置した夜間採集用の灯火によく飛来することで有名であったが、最近では飛来数が相当減少している。県内では豊前市、北九州市、宗像市城山、筑紫野市でも採れている。九州では長崎県の記録があるが、産地は極限されている。生態は不明であるが、英彦山ではスギ人工林の増加につれて本種が減少する傾向がある。

分類・形態:カマキリモドキの仲間は前脚が捕獲脚となっており、一見カマキリを思わせるが、本種は日本産のこの仲間では最大で、前後翅の前縁は先端近くまで褐色となり、体も脚もほぼ暗褐色。体長25mm内

外、開張55~60mm。

分布:(県内)英彦山など

(県外)四国(高知)、九州(福岡、熊本、宮崎、鹿児島)

生活史・生態・生息地:カマキリモドキ科の仲間は過変態をすることで有名で、かためて産まれた卵から孵化した1齢幼虫が活発に活動して寄主にとりつき、その巣へ運ばれるものと、直接侵入するものが知られている。本種については寄主を確認できていない。成虫は灯火に集まる。

(森本)

絶滅危惧Ⅱ類 (福岡県)

エサキアメンボ

カメムシ目 アメンボ科 Gerridae

学名: *Limnoporus esakii* (Miyamoto, 1958)

カテゴリー: 準絶滅危惧(環境庁)

生息状況・危機の状況・選定理由:1958年に福岡市舞鶴公園の標本で新種として記載され、姪の浜、前原など福岡西部地区の産地では消滅した。1992年には古賀市千鳥ヶ池に多産していたがその後は確認されていない。

分類・形態:体の両側縁が平行なことや、触角が体長の2分の1を越えること、結合板の後方突起が棘状で長いことなどで、他属から区別することができる。雄は7~9mm、雌は9~11mmで、アメンボよりも相対的に小型である。頭部以外は褐色で、複眼と触角突

起との間には幅広い黒条が存在する。体の両側縁は銀白色である。頭部は著しく前方に突出する。触角の第4節は第1節よりも長く、全節の中で最長である。

分布:(県内)古賀市千鳥ヶ池

(県外)本州(和歌山)と北部九州だけに分布

生活史・生態・生息地:ヨシなどの水生植物の多く生える池沼に生息している。開放水面を嫌う傾向があるために、主に水際の水草間の水面上で生活している。

(紙谷)

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

オオアメンボ

カメムシ目 アメンボ科 Gerridae

学名：*Aquarius elongatus* (Uhler, 1896)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：以前は県内の山間や山麓の池に広く分布していたが、生息環境の悪化や消滅で激減し、現在では極めて少ない。

分類・形態：触角第1節が最長で、前脚腿節はその中央で幅が最大になることで、ほかの属から区別される。日本最大のアメンボで、雄は19～26mm、雌は21～26mm。多くの個体は全体が黒色であるが、褐色の個体も発見されている。頭頂の基部にV字型の黒斑が存在する。触角は雄では体長の2分の1であるが、

雌ではそれよりも短くなる。口吻の先端は長く、前脚基節を越える。

分布：（県内）県内各地
（県外）本州，四国，九州
（国外）台湾，中国

生活史・生態・生息地：池沼のような止水域だけでなく、流れの緩やかな小川にも生息している。

（紙谷）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

コバンムシ

カメムシ目 コバンムシ科 Naucoridae

学名：*Ilycoris exclamationis* Scott, 1874

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：かつては県内の池沼に多かったが、最近では減少し、1995年と1996年に能古島、1992年に古賀市千鳥ヶ池の記録がある。

分類・形態：体長11～12.5mm。扁平な小判形で、光沢が強い。頭部、前胸背、小盾板および上翅基半分は鮮黄緑色で、暗色斑が散在する。前腿節は非常に太い。

分布：（県内）能古島，古賀市千鳥ヶ池
（県外）本州，九州
（国外）中国に分布

生活史・生態・生息地：ヒシやヒルムシロなどの浮く池沼に生息する。

（紙谷）

絶滅危惧Ⅱ類（福岡県）

タガメ

カメムシ目 コオイムシ科 Belostomatidae

学名：*Lethocerus deyrollei* (Vuillefroy, 1864)

カテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：かつては水田や池に普通であったが、殺虫剤による水稻害虫の集団防除がはじまって以来著しく減少し、環境庁の平成3年版レッドデータブックでは「危急種」に指定されている。山間部に生息の可能性があるが、最近20年以上福岡県での記録はない。

分類・形態：体長48～65mm。タイワンタガメと酷似するが、触角の形状によって区別することができる。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州～沖縄

（国外）台湾，朝鮮半島，中国，アッサム

生活史・生態・生息地：成虫で越冬し、5月末～6月末にかけて交尾、マコモなどの茎の水面から10cm以上の所へ卵塊で産卵する。1卵塊は通常70個以上の卵を含み、約1カ月で成虫となる。成虫は水生昆虫や小魚、カエル、オタマジャクシなどを捕食・吸汁する。

法令などの指定状況：自然環境保全基礎調査：指標昆虫（環境庁）

（紙谷）

準絶滅危惧 (福岡県)

ヒコサンマルクビゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Nebria reflexa hikosana* Habu, 1956
カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1950年5月に英彦山, 1964・1996年に障子岳, 1991~1997年に脊振山から記録されている。本種の主な生息地は, 高地を流れる細流の周辺で, 生息範囲は局地的である。現在の生息状況は危機的でないが, 生息地付近で砂防ダム建設などの開発行為が行われれば, 生息環境が破壊され個体群が絶滅する可能性がある。

分類・形態: 体長8~11.5mm。体はやや光沢のある赤褐色で, 細長く平たい。前胸背板は心臓形。上翅肩部は角張らない。後翅は退化し, 飛翔能力を欠く。
分布: (県内) 英彦山地, 脊振山地
(県外) 別亜種が本州, 四国に分布
(藤本)

準絶滅危惧 (福岡県)

ツツガタメクラチビゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Stygiotrechus unidentatus* S.Uéno, 1969
カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 平尾台の千仏洞と目白洞だけに生息する洞窟性の種で, 千仏洞では1990年代に入ってから生息が確認されている。本属の種は移動能力が小さく, また湿度の低い環境では生息できないため, 局地的な分布を示すものと思われる。現在はそれほど危機的な生息状況ではないが, 洞内のわずかな環境の変化で生息域が分断, 縮

小され, 危機的状況に陥る可能性もある。
分類・形態: 体長2.7~2.9mm。体色は赤褐色~黄褐色で, 光沢はあまりない。複眼は完全に消失する。上翅肩部には1個の顕著な歯がある。上翅条溝は, 第1条を除きほぼ消失する。
分布: (県内) 平尾台の特産種で, 千仏洞と目白洞から知られる。
(藤本)

準絶滅危惧 (福岡県)

ヒコサンヌレチゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Apatrobus hikosanus* (Habu, 1953)
カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1948年に英彦山の標高1000~1100m地点の石下で採集された標本で新種として記載されたもので, 英彦山の高地と豊前坊付近だけに分布している。現在, 英彦山の生息地は安定しているが, 生息範囲が沢沿いの狭い範囲に限られていることと, 後翅の退化で移動・分散能力が小さいことから, 生息環境が破壊や分断されると, 危機的な生息状況に陥るおそれがある。未舗

装で, 雨が降ったときのみ水が流れる林道の石下より得られた例もあるが, こうした環境が舗装整備されてしまえば, 本種の生息地は更に狭いものになるであろう。
分類・形態: 体長11mm内外。黒色。前胸背板は心臓形, 上翅は長卵形で, 肩部は丸くなる。後翅は退化し, 飛翔能力を欠く。
分布: (県内) 英彦山の特産種
(藤本)

準絶滅危惧 (福岡県)

アオヘリホソゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Drypta japonica* Bates, 1873

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、1938年に高良山で1頭採集されただけで、その後60年以上採集されていない。本種が生息する河川の流域やため池の周辺、休耕田や湿地などの、良好な環境の水辺が、河川改修や護岸工事、開発事業などによって次々と姿を消しており、本種の生息状況も危機的である。ただ、隣接する佐賀県鳥栖市で1994年に採集されており、県内でも筑後地方、特に矢部川や筑後川流域から発見される可能性がある。

分類・形態: 体長8mm内外。細長く、特徴的な体形。頭、前胸背板、脚は橙色。上翅周縁および会合線は黒緑色に縁取られ、ほかは橙色。上翅条溝は深く、間室には小点刻があり、一面に黄色の軟毛を装う。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州~九州に分布。九州では熊本の阿蘇地方で普通に見られる。

(藤本)

準絶滅危惧 (福岡県)

オオマルケシゲンゴロウ

コウチュウ目 ゲンゴロウ科 Dytiscidae

学名: *Hydrovatus bonvouloiri* Sharp, 1882

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、1990年に古賀市千鳥ヶ池で4頭採集されただけである。生息地は池沼、休耕田、湿地などの止水域で、水草などの多い浅い所に生息している。九州他県の状況からみて、県内でも今後発見される可能性がある。

分類・形態: 体長3.0~3.8mm。日本産マルケシゲンゴロウ属では最大で、背面は、極めて弱い微細な網目状印刻に覆われ、光沢がかなり強い。上翅は暗赤褐色~黒褐色で、点刻をやや密に配し、2~3条の明

瞭な点刻列がある。

分布: (県内) 古賀市千鳥ヶ池

(県外) 本州(静岡, 愛知, 兵庫), 九州(大分, 熊本, 宮崎, 鹿児島), 上甌島, トカラ列島中之島と琉球列島(沖縄本島~与那国島)

(国外) 台湾, 中国, インド, フィリピン, タイ, ベトナム, ミャンマー, スリランカなど

(松井)

準絶滅危惧 (福岡県)

ルリクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科 Lucanidae

学名: *Platycerus delicatulus* Lewis, 1883

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内の確実な産地は英彦山だけで、標高の高いブナなどの自然林のよく残っている地域に限られ、個体数は少ない。

分類・形態: 雄は緑を帯びた青藍色。雌は黒藍色から銅色, 緑銅色などと変化が多い。雄の脚は赤褐色で、腿節先端は黒色, 雌は赤褐色と黒色の2型がある。前胸背板の後縁角は丸い。雄の大顎がこの属の

中で最も発達し長く前方へ突き出すことや、交尾器の形態で近似種から区別できる。

分布: (県内) 英彦山

(県外) 本州, 四国, 九州に分布するが、主に1000m以上の夏緑樹林帯などに局地的に見られる。福岡近辺では、九重山地や阿蘇周辺などに分布。

(城戸)

準絶滅危惧（福岡県）

ニセコルリクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科 Lucanidae

学名：*Platycerus sugitai* Okuda & Fujita, 1987

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内で、本種の確実な産地として英彦山の記録があり、矢部村釈迦岳でも採れている。本種は標高の高いブナなどの自然林のよく残っている地域に限られ、個体数は少ない。

分類・形態：雄は緑を帯びた青色で光沢があり、脚は黄褐色で、脛節基部と先端、腿節先端は黒色。雌はやや緑を帯びた金銅色で光沢が強く、脚は黄褐色

から赤褐色。前胸背板の後縁角は丸い。雄の大顎は太短い。

分布：（県内）英彦山，釈迦岳

（県外）本州（紀伊半島大台ヶ原），四国，九州に局地的に分布。主に1000m以上の夏緑樹林帯などに見られ，九重山地や九州中央山地などに分布。

（城戸）

準絶滅危惧（福岡県）

ミナミコルリクワガタ

コウチュウ目 クワガタムシ科 Lucanidae

学名：*Platycerus acuticollis namedai* Fujita, 1987

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：本亜種の確実な産地として英彦山，障子岳，福智山，岳滅鬼山，犀川町経読林道，宇美町砥石山があげられる。生息地は標高の高いブナなどの自然林のよく残っている地域に限られ，個体数は少ない。

分類・形態：雄は緑を帯びた黒銅色で光沢はやや弱

い。雌は紫銅色または緑を帯びた唐金色。

分布：（県内）英彦山，障子岳，福智山，岳滅鬼山，犀川町経読林道，宇美町砥石山

（県外）九州北部，四国西部

（城戸）

準絶滅危惧（福岡県）

ムナコブハナカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Xenophyrama purpureum* Bates, 1884

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では英彦山地のみから記録があり，釈迦岳の大分県側でも採集されている。もともと多い種でなく，過去と比べての減少傾向は明らかでない。

分類・形態：体長17～20mm。頭部，胸部，脚，触角は黒色，上翅は赤褐色。前胸には吸盤形の突起が1対ある。上翅は中央でやや細くなる。

分布：（県内）英彦山

（県外）本州，九州に分布。九州では，佐賀を除く全県から記録されている。大分県大船山や熊本県阿蘇仙酔峡では，現在も飛翔中の個体が多数観察，採集されるといふ。

（藤本）

準絶滅危惧（福岡県）

ヒコサンヒゲナガコバネカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Glaphyra nitida adachii* (Takakuwa & Fujita), 1981

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：英彦山と犬ヶ岳で採集されており、英彦山では現在も、4～5月にかけてカエデの花に集まる。現在の生息状況は安定しているが、台風や伐採により寄主のエゾエノキの大木が減少すれば、本種の生息も危ぶまれる。

分類・形態：体長5.1～5.8mm。上翅は短く、腹部の大部分が露出する。触角と脚は褐色で、上翅は鈍い

金属光沢のある藍色。前胸背板後縁は密に点刻され、横じわとならない。

分布：（県内）英彦山地

（県外）九州の特産亜種で、福岡近辺では大分と熊本から、局地的に記録されている。

（藤本）

準絶滅危惧（福岡県）

ムモンチャイロホソバネカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Thranium rufescens* (Bates, 1884)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：本県からは大島村沖ノ島のみから採集されている。沖ノ島は照葉樹林がほぼ原生的な状態で保全されているが、1962年以降本種の記録はない。

分類・形態：体長14～23mm。頭部、前胸背板は赤色、上翅は黒色で、基部3分の1の外縁部に橙色の小紋が

ある。後腿節は基部直後から徐々に肥大する。

分布：（県内）沖ノ島。本種の分布の北限にあたる。

（県外）九州（長崎、宮崎、鹿児島）、屋久島、奄美大島、沖縄本島、石垣島、西表島

（藤本）

準絶滅危惧（福岡県）

クビアカモモブトホソカミキリ

コウチュウ目 カミキリムシ科 Cerambycidae

学名：*Kurarua rhopalophoroides* Hayashi, 1951

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：県内では、1980年に福岡市立花山、1981年に宗像市城山で採集されたが、その後20年近く採集記録がない。立花山では山頂のセリ科やウシコロシの花上で採集されている。立花山の中腹以上にあるクスノキ原生林は国の天然記念物に指定されており、開発による生息地の消滅はないと思われるが、城山では自然林の伐採が著しく、その影響が懸念される。

分類・形態：本種は日本固有で、カミキリムシとしては世界で唯一単為生殖を行う。体長9～11mm。頭の頸部と前胸背板が赤く、ほかは黒色。上翅は中央前にかけて両側が狭まる。後腿節端は膨らむ。

分布：（県内）立花山、城山

（県外）本州、九州、対馬、種子島に分布し、九州本土では福岡のみで知られる。

（藤本）

準絶滅危惧（福岡県）

ミズカマキリ

カメムシ目 タイコウチ科 Nepidae

学名：*Ranatra chinensis* Mayer, 1865

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：池沼や水田、小川などに普通であったが、水稻害虫の集団防除が行われだして以来多くの地点で姿を消している。能古島と志賀島には今も生息している。

分類・形態：体長40～45mm。体は棒状で細長く、尾端に長い呼吸管がある。前胸は細長い。体色は灰褐色

ないし淡黄褐色である。

分布：（県内）能古島、志賀島

（県外）北海道～九州

（国外）朝鮮半島、ロシア沿海州、中国、台湾、ミャンマー

（紙谷）

準絶滅危惧（福岡県）

コオイムシ

カメムシ目 コオイムシ科 Belostomatidae

学名：*Appasus japonicus* (Vuillefroy, 1864)

カテゴリー：準絶滅危惧（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：かつては池沼や水田に普通であったが、水稻害虫の集団防除によって激減し、1965年以降ながら記録は途絶えていたが、2000年に糸島半島の池から採集された。

分類・形態：体長17～20mm。体はほぼ卵形で、扁平である。前脚は小動物の捕獲に適した形となってい

る。

分布：（県内）福岡市西区

（県外）本州～九州

（国外）中国、朝鮮半島

（紙谷）

準絶滅危惧（福岡県）

アズキヘリカメムシ

カメムシ目 ヘリカメムシ科 Coreidae

学名：*Homoeocerus marginiventris* Dohrn, 1860

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：ダイズやアズキの害虫であるが、福岡市西部地域では1960年頃から見られなくなり、近年の採集記録はない。全国的に、豆類の栽培法の変化とともにその発生が激減している。

分類・形態：体長13～15mm。淡褐色で、体は細長い。県内に多いホシハラビロヘリカメムシに酷似してい

るが、体は細く、結合板の各節に2～3個の小さな黒点をもつことで区別できる。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州～九州、南西諸島

（国外）台湾、中国

（紙谷）

準絶滅危惧 (福岡県)

チャイロカメムシ

カメムシ目 カメムシ科 Pentatomidae

学名: *Eurygaster testudinaria* (Geofroy, 1785)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1950年代までは室見川流域, 犬鳴山, 若杉山, 宝満山などで, ススキ, カモジグサ, チカラシバなどの穂上に多く見られたが, 1991年の三瀬峠以降は記録がない。

分類・形態: 体長約10mm。淡褐色または暗赤褐色で, ぼやけた不規則な斑紋をもつものもいる。結合板の

後半は黒ずむ。頭部は幅が広く, 中葉は側葉より短い。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州~九州

(国外) 中国, 朝鮮半島

(紙谷)

準絶滅危惧 (福岡県)

アオクチブトカメムシ

カメムシ目 カメムシ科 Pentatomidae

学名: *Dinorhynchus dybowskyi* Jakovlev, 1876

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 日本全土に分布し本州では比較的個体数が多く, ヨトウガ類の幼虫やハバチの幼虫を捕食したり, クヌギやケヤキなどの樹木からも恒常的に吸汁している。しかし, 県内では生息地が英彦山などの山地に限定され, 個体数も少ない。

分類・形態: 体長18~23mm。金属光沢の強い緑色で,

前胸背後半, 小盾板などが褐色を帯びることもある。口吻が太短く, 頭部の側葉は中葉をかこみ, 前胸背側角が鋭角をなしている。

分布: (県内) 英彦山など

(県外) 北海道~九州

(国外) ロシア沿海州を含むシベリア

(紙谷)

準絶滅危惧 (福岡県)

ニシキキンカメムシ

カメムシ目 キンカメムシ科 Scutellaridae

学名: *Poecilocoris splendidulus* Esaki, 1935

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では古処山山頂のツゲ林に多く, 1962年に脊振山, 1999年に英彦山で採集されている。いずれの生息場所も狭い範囲に限定されている。

分類・形態: 体長16~20mm。光沢のある金緑色に,

紫赤色の帯紋をもつ美しいカメムシとして有名。

分布: (県内) 古処山, 英彦山

(県外) 本州, 九州

(国外) 朝鮮半島

(紙谷)

準絶滅危惧（福岡県）

ベニツチカメムシ

カメムシ目 ツチカメムシ科 Cydnidae

学名：*Parastrachia japonensis* (Scott, 1880)
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：脊振山～杷木町以南に分布し、集団で亜社会生活をする大型種で、幼虫は地面でボロボロノキの核果で育つ。ボロボロノキの分布北限が九州北部であるために、本種も九州北部が分布の北限とされている。

分類・形態：体長16～19mm。鮮紅色に大きな黒色の紋をもつ。

分布：(県内) 筑後地方
(県外) 本州～九州、奄美大島、沖縄本島
(国外) 中国、濟州島 (紙谷)

準絶滅危惧（福岡県）

ハルゼミ

カメムシ目 セミ科 Cicadidae

学名：*Terpnosia vacua* (Olivier, 1790)
カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：4月下旬から6月上旬にかけてマツ林で「ムゼー・ムゼー」と鳴くことでよく知られており、県内では1960年頃から目立って減少しているが、広範囲に少数の発生が継続している。

分類・形態：体長は雄が27～32mm（翅端までは35～37mm）、雌は23～26mm（同30～35mm）。褐色の地に多くの黒斑がある。前胸背には黒色の1縦条、中胸

背には5本の黒縦条をもつ。

分布：(県内) 各地
(県外) 本州、四国、九州
(国外) 中国

法令などの指定状況：自然環境保全基礎調査：指標昆虫（環境庁）

(紙谷)

準絶滅危惧（福岡県）

エサキクチキゴキブリ

ゴキブリ目 オオゴキブリ科 Panesthiidae

学名：*Salganea esakii* Roth, 1979
カテゴリー：情報不足（環境庁）

生息状況・危機の状況・選定理由：英彦山で1938～40年に採集された標本で新種として記載されたが、英彦山ではその後採れていない。九州では、長崎県平戸市安満山、熊本県内大臣、宮崎県大幡池、鹿児島県霧島山、屋久島などから記録されている。大径の広葉樹朽ち木中に穿孔して集団生活をするが、このような生息場所が著しく少なくなっている。

分類・形態：大型で頑丈なゴキブリで、体長26.5～28.0mm。体は赤味を帯びた黒褐色、翅は退化して小さい。

分布：(県内) 近年の記録なし
(県外) 九州、屋久島

(森本)

準絶滅危惧 (福岡県)

ムカシトンボ

トンボ目 ムカシトンボ科 Epiophlebiidae

学名: *Epiophlebia superstes* (Selys, 1889)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 日本各地に分布し、福岡県でも山地の溪流に生息しているが、伐採や道路建設などに伴う土砂流入で川底が不安定になったことが影響して、最近では減少している。

分類・形態: 翅はイトトンボ亜目に似て前後翅はほぼ等しく、頭部はトンボ亜目に似て複眼が相接近し、腹部はサナエトンボ類に近い形態をしている。近似の化石が知られることから「生きた化石」の一種と

して知られている。黒地に黄色の斑紋をもち、体長49~55mm、後翅長26~29mm。

分布: (県内) 山地の溪流
(県外) 北海道~九州、隠岐

法令などの指定状況: 自然環境保全基礎調査: 環境指標生物 (環境庁)

(森本)

情報不足 (福岡県)

エサキメクラチビゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Stygiotrechus esakii* S.Uéno, 1969

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 前原市水無洞で1957年に採集された3頭の標本で新種として記載されたが、その後は採集されていない。

分類・形態: 体長2.6~2.7mm。体は赤褐色。複眼は

完全に消失する。上翅肩部には歯が数本あり、鋸歯状となる。

分布: (県内) 前原市水無洞

(藤本)

情報不足 (福岡県)

ヒコサンオオズナガゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Pterostichus macrocephalus* Habu, 1955

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1952年に英彦山の標高1000m付近で発見された雌1頭で新種として記載され、その後は、1975年に福智山ます淵貯水池、1980年に英彦山、1992年に脊振山、1998年に北九州市平尾台から採集されている。本種は、地下浅層に生息している可能性が高い。

分類・形態: 体長約24mm。脊振山産はやや小さく

17.5~19.5mm。体は扁平で黒色。頭部は大きく、複眼は小さい。雌の上翅はつや消し状。英彦山と脊振山の個体群では形態がやや異なる。

分布: (県内) 英彦山、脊振山、平尾台など

(県外) 九州 (佐賀、大分、熊本、長崎)、長崎県生月島

(藤本)

情報不足 (福岡県)

オオアオホソゴミムシ

コウチュウ目 オサムシ科 Carabidae

学名: *Desera geniculata* (Klug, 1834)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、1986年に北九州市平尾台で3頭が採集されただけである。草原での採集例が多く、開発や遷移の進行による生息地の破壊が危惧される。

分類・形態: 体長9~10.5mm。体は細長く、頭部、前胸背板、上翅とも緑色。脚と触角は黄褐色。

分布: (県内) 平尾台

(県外) 本州~沖縄。九州では、佐賀県嬉野町大野原で採集されている。

(国外) 台湾, 東南アジア

(藤本)

情報不足 (福岡県)

ムモンシリグロオオキノコムシ

コウチュウ目 オオキノコムシ科 Erotylidae

学名: *Pseudaphandra inornata* (Chûjô, 1941)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 1936年に英彦山で採集された1頭の標本で新種として記載された。その後県内では、城山、古処山、星野村石割岳で採集されている。いずれの地でも極めてまれで、成虫は春先と秋に見られ、秋に羽化したものが樹皮下などで越冬するものと考えられる。

分類・形態: 体はやや細長く、体長5mm。赤褐色で、脚は黒い。

分布: (県内) 英彦山, 城山, 古処山, 星野村石割岳

(県外) 本州~九州, 対馬

(城戸)

情報不足 (福岡県)

トモンチビオオキノコムシ

コウチュウ目 オオキノコムシ科 Erotylidae

学名: *Tritoma asahinai* Nakane, 1950

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では、1954年と1958年に英彦山、1973年と1974年に犬ヶ岳で採集されただけで、これ以外の記録はない。福岡県近辺では大分県黒岳で採集されている。

分類・形態: 体長3.5mm。赤褐色で、前胸と上翅に

黒紋がある。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 本州, 九州

(城戸)

情報不足（福岡県）

タカクラチビオオキノコムシ

コウチュウ目 オオキノコムシ科 Erotylidae

学名：*Tritoma takakurai* Nakane, 1979

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1973年に鷹ノ巣山で採集された標本で新種として記載され、その後1995年に英彦山豊前坊で採集されただけである。

分類・形態：体長4mm。前胸に1対の黒紋があり、上翅中央にも卵形の黒紋がある。

分布：（県内）英彦山地（城戸）

情報不足（福岡県）

ヒコサンクロボシハムシ

コウチュウ目 ハムシ科 Chrysomelidae

学名：*Gonioctena hikosana* Kimoto, 1974

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1965年に英彦山で採集された2頭の標本で新種として記載され、その後大分県黒岳でシデの葉上から成虫と幼虫が発見されただけの希少種である。

面は黒色を呈し、上翅に5対、前胸に1対の黒紋がある。

分布：（県内）英彦山
（県外）九州（大分県黒岳）

分類・形態：体長5.5～6.0mm。体背面は赤褐色、腹

（森本）

情報不足（福岡県）

クロアシヒゲナガヒラタミツギリゾウムシ

コウチュウ目 ミツギリゾウムシ科 Brentidae

学名：*Cerobates nigripes* (Lewis, 1884)

カテゴリー：なし

生息状況・危機の状況・選定理由：1938年に英彦山、1963年に障子岳から採集されており、日本では1967年に鹿児島県高千穂峰で採れた1頭が最後である。本種は台風で倒れたブナ枯木の乾いた樹皮下から採集されているので、そのような広葉樹大径枯木の減少が本種の減少に関係していると思われる。

とほぼ等しく、長毛があり、複眼は大きく、体はやや扁平で、赤褐色、脚は黒褐色から黒色、前脚脛節には内側に大きな鈎状の突起がある。

分布：（県内）近年の記録なし

（県外）本州、九州
（国外）台湾

分類・形態：体長6～8mm。雄は触角が細長くて体長

（森本）

情報不足 (福岡県)

アカツツホソミツギリゾウムシ

コウチュウ目 ミツギリゾウムシ科 Brentidae

学名: *Callipareius japonicus* (Nakane, 1963)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 本種は希少種で、三重県平倉産1頭で記載されて以降、福岡県若杉山と徳之島の3カ所で各1頭が採集されただけである。前種同様広葉樹枯木の減少が本種に影響していると思われる。

分類・形態: 体長6.0~7.5mm。赤褐色円筒形で、上

翅会合部と側縁は暗色、前胸は両縁下側が広くくぼむ。

分布: (県内) 若杉山

(県外) 本州 (三重県平倉), 徳之島

(森本)

情報不足 (福岡県)

ハマベゾウムシ

コウチュウ目 ゾウムシ科 Curculionidae

学名: *Aphela gotoi* (Chûjô & Voss, 1960)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 海岸に打ち上げられて堆積したアマモの中に幼虫・成虫とも生息することから、本種の分布にはこのような場所が不可欠であるが、海岸の埋立によってアマモの生育する浅海が減少している。本種は北日本に多く、原産地の三重県阿漕が浦では埋立で消滅し、現在愛知県、千葉県でも産地は極限されている。福岡では埋立前の百道海水浴場で1953年に1頭採集されただけである。

分類・形態: 体長3.8~4.2mm。全体が淡褐色で、前脚脛節外角は細長く張り出し、後脚脛節端には三日月形の外室がある。

分布: (県内) 近年の記録なし

(県外) 北海道, 本州 (青森, 岩手, 千葉, 愛知, 三重 (絶滅))

(国外) オホーツク海沿岸, 沿海州, 千島

(森本)

情報不足 (福岡県)

タカハシトゲゾウムシ

コウチュウ目 ゾウムシ科 Curculionidae

学名: *Dnorhopala takahashii* (Kôno, 1930)

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 本種はスモモの葉に幼虫が潜る害虫として記録され、福岡県では英彦山で1957年にヤマザクラの潜葉虫から飼育・羽化の記録だけである。

分類・形態: 成虫は極めて特徴的で、上翅の奇数間室に顕著な棘がある。後脚は長く、その腿節は中央より先が強く膨れ、外縁が鋸歯状の大きな三角歯が

ある。体長(吻を除く)4.3~4.5mm。

分布: (県内) 英彦山

(県外) 本州 (山形, 新潟, 群馬, 埼玉, 東京, 神奈川, 静岡, 愛知, 石川, 福井, 三重, 岡山), 四国 (高知) から記録があり、いずれの地でもまれである。

(森本)

情報不足 (福岡県)

シロテンシギゾウムシ

コウチュウ目 ゾウムシ科 Curculionidae

学名: *Curculio yoshieae* Notsu, 1978

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 県内では宗像市城山と田主丸で各1頭が採集されただけである。長崎市、長崎県大村市、佐賀県鹿島市、奈良県奈良公園でも採集されている。

分類・形態: 体長(吻を除く) 3.4mm。黒地に白紋があり、白紋は前胸背板後縁に沿って後角から第4

間室前までと、小盾板の周囲、中央後方の第2~3と7間室~側縁に横帯状にある。

分布: (県内) 城山, 田主丸町

(県外) 本州(奈良), 九州(佐賀, 長崎)

(森本)

情報不足 (福岡県)

ヒコサンクシヒゲカゲロウ

アミメカゲロウ目 クシヒゲカゲロウ科 Dilaridae

学名: *Dilar hikosanus* Nakahara, 1955

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: 英彦山で1943年に採集された1雄で新種として記載されたが、その後の記録は全くない。

分類・形態: 前翅の灰褐色の斑点が列と帯を形成する傾向が強くて斑点の切れ目は少なく、単眼様突起の前方のものが円形であるのに対し、同属のクシヒ

ゲカゲロウはやや大型で(開張25mm)、前翅に淡褐色の斑点は少なく、単眼様突起の前方のものは扇形をしている。体長4.5mm、前翅長10mm。

分布: (県内) 英彦山

(森本)

情報不足 (福岡県)

アオヤンマ

トンボ目 ヤンマ科 Aeshnidae

学名: *Aeschnophlebia longistigma* Selys, 1883

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: ヨシ、マコモ、ガマなどが繁茂する富栄養型または腐植栄養型の池や沼、水郷地域の溝川に生息し、北海道南部から熊本県まで記録があり、県内では福岡城の濠、金山で採集され、北九州市若松区でも羽化殻が確認された。いずれの場所でも産地は極限され、個体数は少ない。
分類・形態: 全体として明るい緑色をした美しいヤンマで、前胸の黒い3条、腹部背面の太い黒筋とそ

の真ん中の細い緑の筋は顕著、翅は薄黄色で無紋。腹部第3節はくびれず、複眼は大きい。体長67~77mm、後翅長43~53mm。

分布: (県内) 福岡市, 北九州市

(県外) 北海道南部~熊本, 対馬

(国外) 朝鮮半島, 中国

(森本)

情報不足 (福岡県)

ネアカヨシヤンマ

トンボ目 ヤンマ科 Aeshnidae

学名: *Aeschnophlebia anisoptera* Selys, 1883

カテゴリー: なし

生息状況・危機の状況・選定理由: ヨシの茂った明るい沼地に生息し、新潟、茨城から宮崎まで採集されているが、生息場所は限定されている。県内では福岡城の濠で採れただけである。

分類・形態: 大型、頑丈で、青い複眼の美しいヤンマで、アオヤンマに似るが、若い成虫は翅の基部が

赤橙色でよく目立ち、翅端部は褐色。体長75~82mm、後翅長46~64mm。

分布: (県内) 福岡市

(県外) 本州 (新潟, 茨城以南), 四国, 九州 (鹿児島を除く各県)

(森本)

(文献)

- 朝比奈正二郎, 1991. 日本産ゴキブリ. 253 pp. + 11 pls., 中山書店, 東京.
- 朝比奈正二郎・石原 保・安松京三 (監修), 1965. 原色日本昆虫図鑑(Ⅲ). 358 pp. + 156 pls., 北隆館, 東京.
- 林 匡夫・森本 桂・木元新作 (編), 1984. 原色日本甲虫図鑑(Ⅳ). 438 pp. + 72 pls., 保育社, 大阪.
- 木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説, 539 pp. + 88 pls., 東海大学出版会, 東京.
- 黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之 (編), 1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ). 500 pp. + 82 pls., 保育社, 大阪.
- 森 正人・北山 昭, 1993. 図説日本のゲンゴロウ. 217 pp., 文一総合出版, 東京.
- 森本 桂・林 長閑 (編), 1986. 原色日本甲虫図鑑(Ⅰ). 323 pp., 保育社, 大阪.
- 日本鞘翅学会 (編), 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 565 pp. + 96 pls., 講談社, 東京.
- 大林延夫・佐藤正孝・小島圭三 (編), 1992. 日本産カミキリムシ検索図説. 696 pp., 東海大学出版会, 東京.
- 杉村光俊・石田昇三・小島圭三・石田勝義・青木典司, 1999. 原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑. 917 pp., 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 高倉康男, 1989. 福岡県の甲虫相. 521 pp., 葦書房, 福岡.
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝 (編), 1985. 原色日本甲虫図鑑 (Ⅱ). 514 pp. + 80 pls., 保育社, 大阪.
- 安永智秀・高井幹夫・山下 泉・川村 満・川澤哲夫, 1993. 日本原色カメムシ図鑑. 380 pp. + 144 pls., 全国農村教育協会, 東京.